

が天に向けば大臣長官となる人である。額にむつくり骨の起つたものも大臣となる人である。眉が屏風のやうに立つてゐれば家内繁昌する、背が貝の字のやうで面が田の字のやうであり、眼が曙の星のやうであり、鼻が高ければ公侯の華族となる人である、眉毛が眼尻を越え、また中正に接してゐれば官吏となつて發達する人である。凡そ人の高貴なる相は此の如くである。又一流一藝に秀で或は社會の師表と仰がるゝものには此の相のものが多いのである。

一三、壽命の長い相

○壽命は即ち壽命のある相である、まづ壽命のある人の相は、五岳（額、兩頬、鼻、顎）が寛宏であり、法令（鼻の左右の皺）が分明して居り、眉に長い毛があり、頸に餘計な肉があつて盛り上つて居り、額を横ぎる骨があり、額の皮膚がゆつくりして居り、背の肉が寛く厚く、頭圓く、腦の骨が横に生じ、齒が揃つて堅密であり、額骨（頬骨）が鬢に入り、行くも坐るも端正であり、兩眼に光があり、額が方形（角張る）であり、額から頭の頂に毛が少く、鼻の梁が高く聳え、地閣が角ばつて圓く、背は龜の甲を負ふやうであり、聲が澄んで遠近に響き、額は高く鳳凰のやうであるものは皆長壽する相である。凡そ長壽のものは此の相に依らぬはないが、デブ／＼肥りはよくない、

デブ／＼の水肥りは却つて瘦せたるに如かぬものである。大倉鶴彦翁の如き、淺野總一郎翁の如き特に長壽の典型である。又茲で云ふ額骨が鬢に入つたといふのは眼の下で許り高まらずに鬢にも高くなつて入ること藤山雷太氏の如きを云ふのである。更に頸が下つて肉の豊起するものな富祿のある相である。頸に紐のやうな肉のあるものは壽命の長い相である。骨が重なつて耳を貫くものは長壽の相である。命門（耳の前）に光澤あるものは長壽の相である。耳の厚くして堅く、聳えて長いのは壽命の長い相である、耳の内に髪を生ずるものは長壽である。垂珠が口に向ふのは長壽で、晩年は愈々幸福である。然し此の垂珠が口に向ふものは實際には稀である。多くの實業家のや、その完全な形を淺野總一郎翁、藤田平太郎男、初代安田善次郎翁などに於て見るのみである。却つて普通人にも此耳の型のものが多い。鼻高く梁のあるものは長壽である、獅子のやうな鼻は長命して且富むものである。鼻の骨長く正しく且堅牢なるものは長壽である、口が角ばつて廣く且稜のあるものは貴い人であつて且長命する、人中（鼻の下の筋）深きものは長命する、耳の後に骨の起るもの或は腰圓きが上に硬きもの、胸ひろくして腹圓きものなどは長壽である。耳が堅く立ち上り、眉が高いこと一寸、眼が細くして神があり、耳が紅くして潤ひがあり、額が廣くして段になるものなども皆長壽であり、性質も寛容であり度量も廣い人である。さて又睡る時目を露はさず、歩む時は緩

くりであり、眠る時は弓の如くなり(まづ直ぐに延びて寝るものはいけない)、坐る時は石のやうに動かないのも壽相の人である、人中が深く、齒が奇麗に並ぶものも福壽である。喉骨の高きもの寝ていびきせざるもの、年壽(眼と眼の間)陥いらざるものなども長壽の相である。耳を金木の星に喩へることは前に云つた、之また壽を主とする所であつて、その耳の堅いものは長壽であり、耳のブヨ／＼したものは短命である。山根上下まづ直ぐなものは福壽の相である。腦の後に骨の高く起るものも福壽の相である。眉の長きもの、耳に毛があつて襟首に長い筋のよるもの、耳鳴せずして老ひて頭部に皺のよるものもこれ又長壽の相である。

○凡そ人の壽命を保つのは眉の力にある、壽命をたづねるのは耳にある、壽命を求めめるのは神(身體の氣)にある、壽命を主とするのは聲にある、故に耳が堅固であつて丹色あかいろが兩耳に凝つてゐるのは神が清く質の實つてゐる徹である(従つてその人は長命である)、故に長命の毛が早く眉毛の中に現はれるものである。襟首の條すだも明らかであるのは最もよい二本あるのは特によい。一本しかないものは孤獨である、法令の長いのも壽相の人である、面貌の厚く身體の充實したものは坐るも立つも虎の如くであり、背や腰に肉が豊かに起るものは龜のやうに靜かに呼吸してゐるものである、福の厚いものは背腰が圓いものであり、功德の高いものは腹乳が垂れ、人中の深いものは倉康が満

ちてゐるものである。耳の孔に毛が生じ、長く卷のはよい、垂珠たまりたまが口に向いてゐるのも長壽であり地閣(顎)の廣いのも晩年に福をうけて長命する人である。眼の下に紋の多いのも壽命を増し貴い子を持つ人である。背に三甲があり(首の肉が高く、肩高く腰高きものは三つの段がある、之を三甲といふ)、腹に三壬がある(顎の下、乳の下、及腹の下部のくだれるものは三つの段が出来る、之を三壬といふ)は壽齡を永く保つ人である。すべて骨格の堅剛なものは長壽であること、松柏の緑が變らぬと同じことである。

一四、功名富貴の人の相

○功名富貴をなす人の相は、形を取らずに精神を取るのである。氣魄あるものを取るのである。最も氣魄には大小があり、精神には強弱がある、身體が小さくとも氣魄あるものは自ら雄なる所がある、形が弱くとも精神が内に蘊蓄するのがよい、肥えたり、瘦せたり、身體が短かつたり、長かつたりすることには變化がない。然し尤も媚といふものがなければならぬ、媚といふと人は女子にのみあると思ふが實は決してさうでない、人に馴れるやうな柔らかな潤ひのある、艶氣のある、それこそ怒れば鬼神も避け、親しめば小兒と雖もその膝下にまつわるといふのが媚である。苟くも人

に媚が無ければ格が粗い、感じが刺々しい。媚は又秀氣を兼ねてゐるものである、自然に神氣のあるものである、清くして秀でたのは即ち媚のあるものである。此の人は早く社會に發達するものであるが秀媚にして奇骨あるものは中年に於て發達する、時には晩年に發達するものもある、蒼古して、秀媚なものは老年に至つて發達するものである、然して又その吉は顔面の各部位によつて言はなければならぬが、功名富貴するに至る人の善相は重に眉と目とにあり、鼻梁の勢ひにある、鼻梁は連つて向上するものがよい、又發達は額の勢ひのよいものにある。然し眉や目の勢ひは下に向くのがよい、更に發達の如何は目と眉との間にある、故に眉を學問とする、目を太陰(月)太陽(日)とする、鼻を天柱となし福星とする、眉目が英秀で鼻に連れば日月天柱にか、つて福祿を保ち秀龍の氣を發するの形であるから早く發達するのである、かような容貌な人は十九、廿二、廿五、廿八などで早く社會に名を擧げるものである。

○概して言へば藝術家、畫家、文藝家、詩人、學者、遊藝家、俳優など呼ぶものは秀媚な人が多い、謂はば女性的である、顔の凸凹などの激しくない人が多い、骨が荒くなく、顯骨などが飛出さず、皮膚の細かな優形のものが多い、こゝに五六人の畫家と作家とを擧げて見ようか、平福百穂氏、安田靫彦氏、前田青村氏、小林古經氏、山崎小虎氏、矢澤弦月氏、伊東深水氏、杉浦非水氏など何

れも皆その輪廓が秀媚で一面から見れば女性的である、中には老ゆることを知らぬやうな若々しさを持つものがある、之等は皆媚である。事業家の顔は凸凹が激しい、肉の各部が弓のやうに張つてゐる、之は吉凶以外事業家としての特長である、謂ゆる五星(眉、目、口、鼻、額)が皆その勢ひをなせば功名をなすことができるのである。創作家菊池氏のやうな顔は作家としてよりも事業家としての顔の方に特長がある、作家中村武羅男氏なども事業的才能のある顔である、永井荷風、芥川龍之介などは純然たるそして秀眉な作家としての顔である。

○これに反して額が聳ち邊城(額の横手)の骨が陥つたものは、譬へ眉が秀で、ゐても名を成すことができない(名を成してゐるものに邊城の陥つた人はない)、又眉の間が平滿で廣いものは作家、學者、畫家などとなつて名聲を發する、平福百穂氏の眉と眉との間の廣いを見給へ、小林古經氏も此部が廣い、安田靫彦氏などは平滿の方である、前田青村氏の位のあるのはその額の廣く骨が起つて鬢に入る部にある、天庭(額)が方滿かたみちるにして鼻が正しく額や兩頬や顎の部を見るやうであり、眉が眼と照し合ひ、目は又印堂に侍するやうであり、印堂は額骨に對して拱ねぐやうであり(手を取合つてゐる形)、頬は顎や額と連なり、勢ひ相應じてゐればこれは天が北海をうけ、地が山河を載せた形であるから、たとへ顔の造作が悪くとも秀媚の氣があつて、一路功名の道に進むことができ

るものである。要は眉目鼻口の照應にあるのだから、若し只眉のみ散じたり、中斷したりしてゐただけでもその部は弔應して凶事を起し、たとへ一時成功をなすことがあつても終生その名聲を保つことはできないのである。又鼻は高く聳えて左右上下を顧み、その用をなすのを取るのであるから若し準頭（はたけ）が尖り又は力がなく、或は鼻に梁が現はれたりしてゐると山が斷ち嶺が折れた形となるのでその凶を反照して功名を得られないのである。面を取れば頬が特に用をなすものである、頬が高くとも天倉（目ぶち）の凹んだのは用をなさない、之は頬があつても權がないのである、謂ゆる頬のこけた人はよくない。また眉と口とはその勢ひを参照しなければならぬ、眉と鬚（まゆげ）とが照應するのがよい、顔の五官が生旺（生ずるやうに勢ひがある）すれば一生顯榮して名聲を發する、面部がその垣を失ふやうなのはいけない、目、鼻、口、耳、眉何れでも欠けるのは垣を失ふものである。

之等の五官の外、鬚（まゆげ）も人の一身には至大の關係があると支那の先覺者は述べてゐる。若し紫の鬚を見、金のやうな鬚を見れば、その人は壽命があり福がある、面が満月のやうで眉、目、口、鼻が端美であるのに、若し鬚が發して草のやうであり、或は鬚にまで連なつて鬚が生へ、海底の藻草が生へたやうに繁茂し、頸に纏ひ喉を鎖すものは必ず妻を刑し子を失ふものである。又自己にも成敗があり、大に功名を發するかと思へば大に汚名を被て社會の上表から墜落することがある。又鬚と

眉との關係も至大である。眉の勢ひが鼻に於て發し、勢ひが邊地（米かみの上）に於て起り、眼の精神が眉の中に藏され、注いで額骨に受け、額骨はまた風采をたすけてこれを補ふに兩耳を以てし又これを承けるに顎を以て輔け、口の氣象は上に鼻をうけその勢ひ四周して額に及ぶのがよいのである。故に觀相の時、眉を見れば鼻を考へ、鼻を見れば眉を考へなければならず、その發達するや眉の年にはなくて鼻の年にある、鼻の年はまた眉に於て發する、目が秀で、眉が翠なるものは觀骨に至るの後（四十六七才以後）に發する、地閣が闊く天地（額と顎）と相應するものは早年の中から名聲を發する、五岳の隆起するものは口に至るの年（六十才以後）名聲を發する、凡て鼻は顔の主要なる部分であるが、而もその根源は眉にあるのである。

○尙學問の發達を見るには別に説いた八學堂並に四學堂の吉凶を見るがよい、眼を明秀學堂と稱する、眼は黑白が分明して秀で、長く神あるのがよい、此の眼は文章を以て聲譽を高める徴である耳を聰明學堂と稱し、また聞名學堂と稱する。色の紅く潤ひのあるのがよい、色は面より白いのがよい、圓く厚く桃のやうなのがよい、かういふ耳のものは名譽も財祿もあつて社會に顯揚する。又此の中には名譽が現はれても物質の豊富でないものがある。學問技藝は秀でも財産を得られないものがある。是等の人は鼻が筒を截つたやうでないか、鼻が膽囊のやうでないか、或は鼻道のつか

ぬ人である、他の部が秀でゝゐても小鼻の流れたものは財を得られない、又此の鼻のものは事務的でない、物事が散慢になり勝ちである、又事業家としては不適當である。こゝには例を挙げぬからその實際に就いてよく觀察されたい。

一五、通達する人の相

○人の状貌といふものは皆違つてゐるものである、人の貴賤といふものも、大なり小なりあり、その大小も形に於て同一ではないものである、概して云へば顔の高まつたものは物事の通達する人である。満面に光澤あるものは發達する人である、紅黄の色が満面にあるものは發達する人である體が肉を持ちて充實してゐるものは福を發する人である、音聲の清亮なもの、耳が顔より白いものは發達する相である。面が方形で眼の長いのは發達する相である、神清く氣の爽かなものは福を發する人である。手足細く脂の乗つてゐるものは一生清閑な人である、顔の皮膚に澤あつてすべししたものは一生安樂の出来る相である。眉毛が粗にして秀でるものも一生を清い生活に送るものである。此の眉の粗にして秀でたもの、典型を取つて見ようか、住友吉左衛門氏の眉はそれである、三井徳右衛門氏の眉はそれである、郷誠之助男の眉はそれである。このやうな眉の型は獨り實業家

のみならず、技藝家、文學者などの方面にも數多く見ることが出来るものである。骨格の清雅なるものは一生安康である。神氣の清和なるものは一生聰慧である。耳、鼻、口、眼、印堂ともに清きものは發達する相である。鼻の孔に指を容れられるやうであれば發達する、眼の晴が漆を點じたやうであれば發達する、支那の郭林宗といふ人がかう云つてゐる、「精神は畏ろしい、之れを威と名づける、權勢を主とするのである。」と。即ち精神があれば威があり、精神が無ければ威が無く、威が無ければ權勢はないのである。

○更に眉毛の潤澤なのは官吏となつて發達する相である、眉毛の新月のやうなのは聰明で萬人に超越するものである、耳の門の廣いのは聰明で豁達な人である、骨格が太く宏ければ前途がある、耳が潤つて白ければ名聲を揚げる、耳が若し持ち上げたやうなれば、之は天下に名を擧げる人である、學者などに此型のものが多い、腹が太つて兒を抱いたやうであれば、名聲が四方に聞知する相である、腹が圓くて下に向けば聰明であつて學問文章のある人である、額の上の角(驛馬)が高ければ宮城を歩む人となる、驛馬の高い人と云ふのは田中義成博士のやうな額で、かういふ額の人は學者なれば御進講などに召し出されるものである。眉が高く聳えてゐれば官祿が高くなる、臍に李を容れるやうなれば、朝廷に仕へる人となる、耳の輪廓が完全なれば財と名とを得られる人となる、

耳が高く廓があれば、一生安樂である、鼻が額より高く聳えておれば四海に名を馳せる人である、口が螺のやうにつぼんでおれば獨り樂しみ獨り歌ふ人であつて、交友が少い、口が闊くて唇が薄ければ、音曲歌などを好む人である。大倉鶴彦翁の口が大きく唇の薄いの即ちそれであつて翁は一中節の名人である。音楽家又は遊藝の師匠などに此の型のものが多い、一流となるものは尙此の型が完全してゐる、新内の富士松太夫さんは大きな口で唇が薄い。齒が白くて玉のやうであれば自然に安樂であり、財産は自然と出来、苦しんで作るせわがない、胸や背が平滿なれば、名譽を得る相である、鼻が獅子のやうなれば聰明にして潤達の人である、濱口雄幸氏はさうである、三土忠造氏がさうである。胸が廣くして長ければその人才智があつて榮昌する相である、又清く秀で、長ければ天下に名を擧げる人である、俳優伊井容峰、常盤津和佐太夫さんなどにその類型を見る、髪を長くして細ければ、名もあり利もある、神がその形に稱ひ、情が舒暢すれば神光は面に滿ちて富貴は心のまゝである。器宇が高く昂れば一生の間快順で、苦勞といふものはない、瞳睛が黒く口が闊ければ文章を以て世に現はれ、眉秀で、神和すれば閑雅な人である。身が小さく聲が大きければ人に超えて發達する。

○前にも述べた通り、その人の聲を聞いて、音聲が清く暢びてゐるものは成すことも亨る人であることが分る、従つて聲のガサツクものは事業も成ることがない。歩行するのに外輪に大きく歩くものは歡樂の足りる人である。反對に男でありながら内輪に歩く人は心に苦しみがあるか、憶病の人である、起坐の端正なるものは家を興し兄弟をいつくしむ人である、眉が鬢に入るものは偉大な志望を抱いてゐる人である、瞳が環のやうなれば蘊畜があつて群を抜く人である。眉秀で目清く額の角が廣ければ早く功名をなす人である。身瘦せ容貌清く骨が凛然としておれば、文章を以て後世に傳はる人である、面が丁字の如く、立てば松のやうに高く、脚短く、身長ければ大臣大將になる人である。印堂(眉の間)に紅色があれば利益が行く所に従ひ、天倉(目尻)の色に潤ひがあれば、何事でも通達するものである。

○此中には又一度失敗しても再起することの出来る相がある、之を人相上では窮通と云ふ、一度窮つて亦通するのである、これ亦自然の理であるが、窮まるだけで通じない人もある、窮まつて通ずるのは窮迫の人の相よりは吉なのである。窮通の人の相貌は、先額が丸く鶏卵のやうな形であり髮際が低く濃く、眉頭の上部に接してゐるものである、額の中央部及び目角月角、印堂(兩眉の間)が俱に陥り、眉毛が黄に薄きものなどは何れも初年三十才前後までは不利である。眼がドンヨリとして居り、山根(鼻の附根)が凹みおち、下まぶちが深く陥り、兩頬が腫れぼつたく鼻の中部に節

があり、或は鼻の先がうすく尖り、鼻めどが天中を向いて居るものなどは中年五十才前後が不利である。人中が平らで、有るかないか分らないもの、鼻めどが上を向き、法令が明らかならず、口が歪んで兩角が下り、唇がうすく火を吹くやうであるもの、唇に紫黒色を帯び、齒が露はれ疎く並び且黄色であり、兩頬が削つたやうであり、顎が尖り、髯がつゝ立つてゐるものなどは晩年七十才前後が不利である。假に初、中、晩年とも充滿豊隆してゐれば、即ち完美して云ふ所がないものであるが若しどの部分でも削れたり、歪んだり、傾いたり、又は小さかつたりすればその間が不足するのである。だから秘訣にも云つてゐる、耳が眉より高ければ永く貧困するに至らないものである。背に肉があつて腰に骨がないものは、初年幸運があるが中年に至つて滯つてしまふものであり、腰に肉があつて背に骨がないければ初年は困苦しても中年から通達するものである。若し骨格が清奇なれば晩年には必ず發達するものである。身體が小さく聲が大きければ必ず超越する人である、印堂が中正なれば官吏となつて發達するものであると。

○凡そ人の相には前に富んで後に貧乏なものがあるかと思へば、前は貧乏であつても後年に至つて富むものがある。名譽の得失についても前後同一でないものである。仕官、就職、商賣の得失などに就ても前後同一でないものがある、それらは皆相法上に於ける各部位の運限と云ふものを考へ

て見なければ當らぬものである。早年に發達する者は額が闊く印堂が明らかなものである。晩年に困窮するものは顎が缺け、頬のこけ落ちたものである。中年に艱難するのは鼻柱が小さく鼻めどが上を向き、又は顔の中部が凹んだものである、精神の散慢するものは功名を望むでも得られない、音聲の枯れたものは發達を期することができない、歩くときに頭が足の先より出てゐるものは、資力の備はつた時には却つてほんやりしてゐる人である。物を言へば高く急燥せうにして突つけんどんであるものは、何もない時には却つて何かしようと考へてゐる人である。(少しでもあれば惜しくなるのである、こんな者には何事も出来ない)。鴛鴦のやうな背で、鳶のやうな肩のものは、騰り易く折れ易い(向つ腹立ちで一時に思ひ立ち、一時に止めるといふ風であるから事業ができない)。人相は凡てその部位が備はらなければならぬ、又その部位の吉凶で運勢を見るのである。

一六、成敗のある人の相

○人の貧富といふものは天に因て定まるものであるが、事の成敗と云ふものはその人の力如何にあるものである、こゝでは一度成功しても亦必ず破敗する事のある相を述べる。

○此の相は富家に生れやうとも獨力で一度成功しようとも一度は破れの生ずる相である。まづ額

の前に髪がたく尖つて禿げるものは敗れをなす事があり、それがために莫大の借財を負ふことがある、婦人も同様である。耳の輪廓が不鮮明にして花の開いたやうなのは賤しくして敗れをなす人である、耳の内に痣などがあれば中年刑事にかゝり破敗することがある人である、鼻が左右何れかに曲つてゐるものは一度必ず破れを來すことのある人である。又妻を尅す人である、山根(鼻の附根)大にして直下し準頭(はながしら)に至るものは財が蒐らずして成ることがないものである。口、唇が上下に翻り人中短きものは家を破つて壽がない(長生をしない)、耳に天輪があつて地輪のないものは敗れを來すことがある。地輪は内部の下の骨、眼に白み(鞏膜)多く神の沈むものは財が集まらない、額が右に偏して枯る、ものは祖業を破るものである、印堂(眉の間)が連なつてゐるものも家業を失ふものである、眉頭が髪に連なり、腮が短かく、髻の少ないものは家産を破る、印堂に紋のあるものは父祖の業を消亡する、また屢々火難に逢ふ人である、齒が露はれて唇の縮むものは敗れをなし、衆情(しよじやう)を得ないものである、左の齒の缺けたものは中年に破れをなし、財産を得られない人である、貧賤の人は財に離れ人が散じて孤獨となる、髭が唐を過ぎないものは營々辛苦し、また朋友の力を得ないものである、財を得ても散り、子孫の力となるものがないものである。手の指が硬くして疎きものは財を破る人である。手の指の透くものは財が集まらない、聲が枯れて鐘のやうなものは敗れを

來し且孤獨性である。話中に聲が斷絶するものは敗れを來すことがある、鴨のやうにガア／＼聲するものは家産を破る人である、その外談笑の中に咳を發するもの、笑ふたびに唇を翻へし、齒ぐきを現はすもの、額が小さくて頭が尖り、頤のすほむもの、形容の消碎せるものなどは、たとへ巨萬の資産があつても次第に銷亡して貧窮となる人である、鼻が尖り、口が尖り、額が尖るもの、兩耳が反り、兩唇が反るものなどは、早く親譲りの田地をも賣り盡す人である。歩む時足より上半身の方が先に出るものは、金錢があつても貯蓄心のない人である。扇風の耳で(耳の部参照)眉が淡黄であればその人の言ふ事は半ば嘘である、その人はまた不正な事を好み、又小人を愛し君子を遠ざける性悪の人である。坐つて膝を動かしてゐるものは財が止まらない、赤脈が腫を侵してゐるものは若年の時に産を破り盡したものである。赤糸のやうな筋が眼球を貫けば住宅にも困つてゐるものである。額の瘦せて細きは祖業を破り、又祖父の力を得ないものである(額の狭きものと同じである)、地閣(顎)が低く引込んで顔色の昏暗するものは家産を蕩盡する人である。

○その外尙ある、涙堂(目頭の下)深くして黒きものは家財をも賣り盡す人である、鼻が歪み耳の反るものは財産を賣り盡す人である。鼻が籠(かご)に似てゐるものは早く財産を失ふ人である、耳が薄くして白きは土地田畑をも賣り盡す人である、耳が黒くして花の如きは一生薄命を嘆く人である。

○人相上には更に物事がふさがり通じて成功することのない相貌がある、従つて此の相のある人は何事も成し得ない、なしても成就しないものである、むしろそれがために大苦しみをする不遇な生れの形である。此の形のはまづ满面何となく憂ひを帯びてゐるものである、此人は物事滞り多くして貧である。塵が满面に生ずるやうなものは貧乏である。背を失つてゐるやうに肉がなく薄弱なものは滞りが多い、背は肉があつて平らなのをよしとする。鼻の孔が露はれてゐるのは錢財が集まらぬ。然し小鼻が怒つてゐればよい、小鼻の流れたものはわけて凶である。虎眉（虎のやうな眉）の濃密なものは運勢が塞がつて通じない人である、向ひ合つた時何となく神氣の枯燥するやうなものは發達しない人である。眼睛に神なく、眼が出で頬が高く、眼ぶたの深く陥つたものは常に意志が通らない、歩くと唇が盛り上り、物を云ふと唇の反るものは困苦する人の相である。身が長くして手の短かきものは少年時代意に叶はざることはないが、老年に至つて成すなき人となるものである。「識人論」にかう云つてゐる、肥えて肉の露はれるを欲しない、（肉が盛り上るやうなはいけない）、瘦せて骨の露はる、を欲しない、骨の露はれるのは即ち辛苦の相である、家の垣根も薄ければ壊れやすい、酒も薄ければ酢となるものである。鼻は薄ければ破れ易い、人も薄ければ亡びやすい凡そ薄きものは最も賤しく、厚きものは貴い、それは自然の道理であると。

○尙窮迫の相は限りがない、凡そ男女とも唇、雞の肝臓のやうに赤黒いのは窮寒の人である、胸が狭くして堅に長いのは、名を求めて努力してもその名が揚がらない人である、髪を粗くして麻のやうなのは老年になつてから家を破る人である。口の上に黒子や皺のあるのは約束事の守れぬ人である、女子は子縁が浅い。背が廣くして胸の狭いものは晩年孤獨で窮する人である、面が細くして瘦て粗きものは窮困にして孤獨の人である、男子の腰の細いのは破碎と名づける（凶である）、此の人は財祿を積むことができない。唇うすくして無きが如きは老年に至つて成すなき人である、魚尾（目尻）深く陥つた人は、志氣があつても伸ばし難いものである、口の兩角が垂れ下つたのは心も肝悪であつて財も得られない、他の救ひがあれば之を免れるが、表面と裏面との全く違ふものである、表は道德家に見えても裏は不道德家である。蜂のやうに細い腰で背のまん中に割れたのは、老年になつてから田地を賣り、或は寄邊なくして彷徨する人である。

○元來人の通達するものは自然に威があるものである、従つて相貌の揚らないものは志を得ない人である、體格が莊重でなく、吹けば飛ぶやうで何で社會に超達することができよう。氣が濁り神が枯れたのは、コソコソ泥棒である、神が昏く骨の濁つたものは馬方か土方のやうなものである、魚局（目尻）に紋の多いのは老年になつてから安樂に暮せない人である、容貌が生れつき泣くやうな

ものは一生の間、滞りがある、面に筋が蜘蛛のやうに這つたのは、財も少く苦難が多い、滞りのある中にも明らかな部分のあるものは憂ひの中にも喜びがある、明らかな中に滞りのあるのは吉の中に凶をなすものである、満面に塵が生じたやうなものは、志を得ない人である、一身が粗澁なのは必ず困苦の人である、身體が常に氷のやうに冷たいものは、絶えず艱難辛苦をする人である、眉が螺のやうに巻いてゐるものは、たとへ清貧を守つても必ず節を失つて汚名を流すものである、更に貧乏して子のないものは、鼻が仰むいて悲しむやうな形容をしてゐるものである、時世に遇はないものは眼が昏く恨むが如き容貌をしてゐるものである、頭の骨が削つたやうに傾斜するのは早く孤獨となつて窮苦するものである、鼻骨が途中で折れて陥つてゐるのは中年に財を破つて貧となるものである、形色の自然に枯槁するものは、發達する途のない人である、眉の散亂するものは金錢を聚むる術のない人である、山根（鼻の附根）の斷つが如く凹んだものは幼年にして病苦に遇ふことがある、額や顎の小さなものは病苦に遭ふことがある。額や顎の小さなものは老ひてから困窮するものである。齒が露はれ、眉の卓つものは官吏勤め人となつて出世をしないものである、眉が散らばり口が撮むやうに反つたものは職を得るも發達しない人である、鼠の目のやうなものは職に任じても上位にのほることができないものである、腰が細く、身體が燕のやうに軟かなものは功名を求

めても得られない人である、愁ひのある眉撮みあげたやうな口、これは年中樂しきことがないものである、雜紋が眉と眉との間を貫けば、毎日艱難を云はなければならぬ人である、かような人は樂しい事を聞いても喜ばず、心中常に困苦を抱いてうれひ事が多いものである。かような人は自分の心も測ることも出来ぬやうに一向にその方向が定まらないものである。

一七、婦人の貴相、富貴、貞淑、長壽の相

○凡そ一陰一陽その道が亂れず、一剛一柔その理の違はざるは人の生である。こゝに即ち夫婦の道がある、男子は陽をうけ、女子は陰をうける、男子は即ち純陽の形である、故にその體は剛にしてその用は健である、女子は即ち純陰の形である、故にその體は柔かにしてその用は弱い。女子が之に反して剛となればその性も勇となるのである、及び雖々しくて燥がしい、男勝りはこれである、これは決して女子あ中正を得たものではない、却つて男性を悖逆する形である。女性が柔和で、儀貌に媚があるものは、富貴にして貞潔なものである、若し性質が剛健で、謂ゆる男勝りであるものは、女形であつて男子の量が多分にあるものであるから、夫縁が薄いか夫を尅して夫が不遇となり病態となり、遂には早世して寡婦となるものである。

○女には自然に威厳があり、骨がしつかりして居り、何處となく重々しいが少しく色つばい媚態があり、顔の調子が平分して居り、行動が緩々として水のやうであり、聲が含み聲で餘韻があり、耳が厚く、額がまるく、骨がでこぼくせず、骨肉相應で、色が少し淺黒く、手指が纖長であるものは高貴の人の夫人となるものである。此の謂はゆる媚態のある女性の最もよきタイプとして高木乗は前鐘紡社長武藤山次氏夫人千世子さん及び前總理大臣高橋是清氏の令息高橋是彰氏の夫人頼子さん（父は菊池寛太郎氏）を知つてゐる、是彰氏は男性として後には高位に陞り榮爵に輝かす人であるが、その夫人の頼子さんも福徳人として長壽圓滿である、夫人は晩年肥滿して女性の富貴な相をなすものである。最近幾多の若き人々の結婚を見たが、此の御夫婦ほど吉相の具備してゐる人は見た事がない、高橋是清氏のあの福徳圓滿なる相は自然その子孫にも傳へられてゐるやうである。（然し非命に斃れたのは謂はゆる殺（サツ）なるものためであつて、此の事は別項「百樂問答」の中にかがけてある）又五岳（額、兩頬骨、鼻、顎）が厚く重々しく、骨氣が磊落であり、神色が温かに潤ふであり、皮膚がガサつかず、骨が太く、穩やかに物を視るも亦高貴の人の夫人となり、普通人でも夫婦共力してその家を富ますものである。婦人の相は威厚があつて、燕のやうに聲が和らからあり、耳が厚く、顔が圓く、眉が秀で、項（頸の後枕をうける部分）が長く、目が澄んで清く、人

を視る時に威と媚とがあり、人中（鼻の下の筋）がはつきりして居り、頬骨が肉にかくれ、その部がなだらかであり、唇が赤く齒が白く、骨立ちもせず、肉ぶとりもせず、骨と肉とが助け合ひ、手の指が纖く長き相のもの女は、これ性の貴いものであつて生涯幸福である。更に耳は頭に貼りつけたやうであり、唇は厚く、手掌が紅色をして潤ひ、目の美しいものは性質も寛やかであつて婦道を完うするものである。

○腮（頬の下の骨のある所）が肉に滿ち、顎が闊く、人中が長く、小鼻が縮り、或は顔の各部が平均し、鼻の孔が平らかであり、顎全體が廣く、手の平でうけ取るやうであり、耳の下に肉があり腰が圓く、厚きものは婦人の富貴なる相である。

○女子の小鼻の流れたものは第一に經濟心が薄く、精神も縮らず、兎角物事投げやりになり他の部の悪しき時はその品性にまで關係して來るものである。

【1】女子貞操の相——次に女性の貞潔なる形をいへば、眼がはつきりとして居り、柔剛力があつて、情には厚く義には強く、反發する時は石の如く堅く、頬骨が現はれず、此部が隱々として力があり、目の神が澄みて自然の力があり、眼の黑白が分明して居り、目を斜めにして物を見るやうな事がなく、嬌にして威があり、媚にして女も惚れるやうであり、行くには緩やかで歩むには軽く、

身が正しい心性が柔かであり、耳が厚く、顔が圓く、鼻がまつ直ぐであり、髪があまり厚くなく音聲が澄んでゐるものでなければならぬ、これは女性の貞操なるものである。今貞淑の聞えの高い藤堂高寛氏の夫人武子さん（父は子爵小笠原長生氏）は、此の嬌にして威があり、媚にして態のある女性の典型である。

○また撫で肩で背が廣く、立てば龜の子の立つたやうな形の婦人は貞操觀念の強い人である、婦人は全體に此の圓い形のものが貞操である。處女時代にも過ちがない、髪が長く黒く、額が正しく地闊（顎）の方形なもので、唇が紅く齒が銀のやうに白いものは身を謹しみ用を節して、家を榮えさせる女性である。

○婦人としての形が餘りに方つきすぎたのは、何處かに男性の量を澤山持つてゐるものである、人形のやうに表情のないはいけない、鼻筋が劔の峰のやうな尖つたのはいけない、口の大きいのはいけない、始めは女中奉公などをなし、一度夫を持つが、晩年は孤獨となる、女性の幸福であり長壽であり長壽であるのは概して姿のよくないものである、姿のよくないといふのは、卑賤なのではない、却つて異相を持つてゐるものである。但し妻女にも肉のまるいものは秀才に嫁して貴きを得る裾の寒いものはいけない。その意味はいろ／＼に違ふが、女性として異相のある人は學者では

徳富蘇峰氏夫人、實業家では大川平三郎夫人、獨立した人では嘉悦孝子、吉岡彌生女史などがゐる

【2】婦人の貴い相——更に女性の賢にして貴いものがある、その相はまづ龍角の首（龍角は額の中央部から左右に分れる骨である）が、織々として細く起つて髮際に入るものである、その相のものは支那では后妃になるものであると云つてゐる。天中（額の真中）と印堂（眉の間）に玉のやうな骨の起るものは后妃であると云つてゐる。之が微かにあるものは氏なくして玉の輿に乗り、高貴の人の夫人となると云つてゐる、印堂が高く肉づきよいものは地方官局長などの夫人になる資格がある、牛角（眉の上の骨）輔角などの隠々として骨起るものは軍人の妻となり、將帥の夫人となるものであると云ふ、更に頭が圓く項の短かいものは富貴となる人である、顔が平らかにして方なるものは貴い相である、眉の長く秀づるものは賢婦である、眼が秀でて清いものは貴い相である、鼻が圓くして直く筒のやうな形をしたものは富貴にして壽命の長い人である。眉が八字形に分つものは柔和であつて富有な相である。口が紅く稜のあるものは宮中に仕へる、舌が蓮の花のやうであれば賢淑な女性である。唇が朱砂のやうなものは夫を助けてその家を富有にする、齒が拓榴のやうなものも貴い、人中の深くして廣いものは子供が多い、狭いものは子供がない、あつても育ち難いものである。又目の下が潤澤なものは兒縁がない、耳の紅く厚いものは貴

い、耳の輪がはつきりして廓のあるものは賢い人である、左の耳が右の耳より厚ければ、先に男の兒を生み、右の耳が左の耳より厚ければ先に女兒を生むものである。唇に紋理すじの多いものは子供が多い、頤おとがほ、頬などに肉があつて垂れるものは富貴である、髪が青く細く糸のやうなのは貴い相である、婦人の掌が紅く軟かで綿のやうなのは富福かほゆである、骨が細くして肉に膩ぬのあるものは貴い、質が清く皮膚に自から香氣のあるやうな女性は高貴の人の夫人となる、神が静かで氣の安らかなものは貞潔である、笑つて目が閉ぢ和美な形になり、行くに緩やかなものは賢淑な女性である、足の底に黒子のあるものは夫を援けてその家を富有にする、腋の下と乳この間に旋毛の生ずるものは貴い子を生む、以上は又皆婦人の貴い相である。

【3】婦人富貴の相——次に婦人の富貴なる相は、まづ眼が長く髪が黒く眼瞼の重なるもので、この相の婦人は夫縁もよく、中年から高貴で且貴いものである、又眼が漆で染めた様なのは聰明である、身が肥えて顔の豊かなのは一生富貴である、婦女の身體は上下起居なども不正なのはよくない、頭が圓く齒が白く、唇が方正なのは富貴な上に普通人でも衣服や貯金などの多く財物を持つことが出来る人である、女の富貴な人は行ひがおだやかで聲に興味がある、物を眞直に見て斜に見る様なことはない。これは必ず老後も安らかで又賢い人である、婦女の身も大きくして方形

なのがよい、眼が長く、眉が聳えて居れば、衣食が充分である、額や顎や頬が豊かに肉づいて居れば家計も豊かで子孫も繁盛する、更に精神が澄み、體にうるほひがあり、その上髪が漆のやうに濃く、耳が聳え、山根(鼻の附根)が眞直であれば生れながらにして富貴である。之に反して額が斜で、身が細く、面が軽く干枯びた様であり、更に人を斜に見るやうな者は、一夜にして二夫三夫にまみゆる娼婦であり金が持てぬ、頭が斜に聳え、顔一面に生毛が生え、額が角張り眉が大きく、聲が男のやうな者は、老年に至つて孤獨となり、自分で働らいて、自分で生活するものである、頭が四角張り額が聳え、鼻が低いものは金銭も持てず、あれば有りたけであり、經濟觀念が薄く、中には人の妻でも貞操がなく、親も夫も害して不幸に陥るものである。此中には婦人の富貴にして孤相なるものがある。孤相と富貴の相とを併せ得たものは吉岡彌生、鈴木米子、下田歌子、嘉悦孝子、山脇房子此の中には一度結婚に破れて後は獨身で通した下田女史の如きものがあり、夫の死後、夫に代つて大財産を作つた鈴木よね子の如きものがあり(後は没落したが)、夫はあつても、無きに等しかつた吉岡女史の如きものがあつて一様ではない、その缺點長所は併せて考へられたい。

【4】婦人の七賢——婦人に七賢なる相がある。此の中の一つだけあつても、夫は榮え、子は秀才

となり、自身は幸福となるものである。

歩行も正しく緩くりするもの、面が圓く身體の厚く重いもの、五官（目、口、耳、鼻、眉）の正しいもの顔の上中下とも正しく揃ふもの、容貌に媚があつて嚴整なもの、言語にむらがなく浮つかぬもの、坐つても睡つてもともに正しいもの、これを婦人の七賢と稱するのである。

【5】婦人の四德——婦人に四德の相がある、その一ヶ條を備へてもその人は德のある人で、多くの人に敬はれ、貴い子を生み、一家幸福である。

平素物事につけても人と競争などしないもの、いかに困苦しても怨み言などは云はぬもの、平常飲食を節してゐるもの、事を聞いても無暗に驚いたり喜んだりせぬもの、人をよく尊敬するものなどは、皆德のある相である。

【6】女子長壽の相——更に婦女の長壽なる形をいへば、手が鷹の爪のやうであり、爪が鎗のやうなのがよい、齒が白く唇が紅色をして容貌のピンとしたのがよい、このやうな女性は聰明で賢良である、顔が圓く平らで凸凹のないものは情愛があつて穩かな精神を持ち、夫に従順であり、兒に優しく人に美むほどである女の同字面や田字面は吉である。その上に胸が闊く肩の圓いのは大吉である。鼻梁が端正であつて面が黒く身が白く、坐れば石を据えたやうなものは伉麗も睦まじ

く福德のある女性である。顎が重なり腹が大きくして下り、骨が十分に肉を持ち、髻が薄くして黒い者などは弟兄が仲よく、夫婦の間も睦まじく貞靜な女性である。物を見る時正視し、怒らずして威があり、聲が遠くで叩く鐘のやうであるものなどは何つても貞淑で且長壽が永く、たとへ初めに苦勞することがあつても老後には幸福となり、子孫の教養をうけるものである。

○次にはまづ耳が長く、神が靜かでありそわつくやうな事はない、法令（小鼻の左右から出る皺）が長く、人中が深くして闊く、項や頬に勢ひがあり、目が清くして澄徹し、眼の黒白が分明し、言葉が軽くして細く、圓實にして堅く響き、項うなじに二本の筋があり、腹が垂れて皮が寬く、鼻筋に肉があつて豊かであり、坐るも視るも端正であるものはこれ女性の長壽に至る相である。

前に述べた顔や形の圓いもの、背の厚いもの、胸の廣いものなどは貞操ある婦人であつて能く夫を援け、家業を盛んにし、謂ゆる内助の功を擧げるものであると同時に、又その壽命も長いものである。進せ細つたものに長壽なるは少ない。

一八、婦人の凶惡、淫踐、短命の相

【1】婦人凶惡の相——今婦人の惡しき相を述べれば、まづ頭が尖り、頬が反り、蛇のやうにシネ

クネ行き雀のやうにチョン／＼歩み、耳が反つて弓のやうであり、目の精が散亂し、或は媚のみあつて自重の態がなく、剛でもなく柔でもく、五官（顔の道具）が不正であり顔に日角月角がなく、或は中が凹んで左右に骨が分れ、腰や體を斜めにして柔らかく、笑つて定まらず、鼻柱が折れ砕け、又は力なく、平らであり、唇が巻いて反り返り、口が撮んだやうに突出し、成は眉が偃月の如く、眼が桃の花に似、聲が浮いて氣の浅いのはこれ女性の輕浮下賤淫佚なるものであつたとへその中の一部が悪くとも、何かの凶事とその身に纏ふものである。更に口が頬の全體よりは高く、聲が散じ髪が黄にして鼻が曲り、或は鼻孔が露はれ、目が凹み、鼻に節があつて骨が横はり、面が黒く、體が硬く、粗澁にして媚もなく、態もなく、聲が破れたやうであり、額が高く項短かく面が促るものなどはこれ女性の最も凶しき相である。また眉が厚く、骨が硬く、顔の下方の半部が突出し或は頬骨が飛出し、いつも泣いてゐるやうな形であり、或は額が鶏卵のやうであり、目が長くして目ぶちの肉に乏しく、聲が男性を帯びて顔が黒く、又は蠅のやうな顔であり、毳のやうな頭であり、眼の玉が露はれ、或は三角であるもの、鼻に鈎の紋があり、淚堂（眼頭からの肉）が枯れて陥るもの、笑つて赤い齒ぐきのあらはれるものなどはこれ女性の孤なるものであつて、幾度結婚しても遂には夫に棄てられて寡婦となるものである。

○更に身が柔かにし、聲が弱く、肉が多くして骨が少なく、眉が長く目を壓し、人中が短かく鼻梁がなく、精神が泛濫し、立居が正しくなく、坐臥が安らかでなく、唇が反り齒が露はれ、項が折れ腰に肉がなくして筒のやうであり、裾の寒けなのは、夭折する女の相である。

○また額の角に旋毛あるものは結婚してから悪死することがあり、難産で生命を失ふことがある、額が狭くすぼみ髪の短かく垂れるものは貧賤である、髪が拳で握るほどしかなく、赤黄色を呈してゐるものは貧窮に苦しむ相である、髪の毛が立ち眉の連なるものは夫を尅し嫁してからその夫は不遇となり或は病態に陥り又自分に産厄があり、眉が薄くしてバラ／＼なものは夫縁が變り、子を害し、子が育たぬものである、目の下にタブ／＼した餘計な肉のあるものは難産に遇ひ又は兒を尅して兒が育たぬものである。赤い紋が眼の玉を貫くものは産厄がある、日角が三角形をなすものは悪性な女である、物を見るに正しくないものは密通しかねまじき女である、鼻が凹み鼻の孔の露はれるものは如何程富有の家にあつても嫁してから貧に下り夫を尅して夫は不遇となり病態となるものである、鼻が尖り、又は斜めなものは貧賤で悪性である、人中の狭くして平らなものは子がない、兩頬が高く棚をなすやうなものは夫を尅し、またその性質も兇暴である、色情にも強い、口が大きく横に開けたものは三四度縁が變るものである、又夫を尅し夫は尻の下

に敷かれる、頬骨の出たものも夫を尻に敷く、唇が薄く一文字をなすものは下賤で心性にも毒がある、唇の下が飛び出してゐるもの（謂ゆる受口）は下賤で夫を尅し、夫はあるかなしにされる之も夫を尻の下に敷く女である。且その夫は不遇となり病態となり早く此世を去るものである。之はいかなる美人と雖も免がれ難い、額の四角なものも同様である、唇が寒く齒の現はれるものは（出齒）は夫縁が浅く、再度三度結婚をするか妾となる、人に逢つて無暗に笑ひながら話を強いて眉を上げたり、肩を下げたりする者は、夫を捨て子に背き、外のもの、親となる、口の角が双方に垂れて薄くへの字のやうな形の者は、孤獨にして寄邊のないものとなる。たとへば嫁しても幾度か夫が變るものである。

○人は誰しも眼の大小、耳の大小があるが、それが甚だしくなると男子は父母、兄弟、妻子を尅し、女子は夫を尅して早く夫に先立たれ、生涯寡婦となつて世を送るものである、細長い人に幸福な人があるが、骨太なのはよろしくない、身體の細長い時は骨の細く清らかなのはよい、従つて女子の凶なる形をいへば唇が青く舌の黒いものは淫穢で下賤である。耳が反つて垂れ下るものは夫を尅し子を刑し、遂には孤獨となる、耳が小さくして黒いものは命が短かく或は窮困の淵に居るものである、面が黄色くして頬骨の高いものは夫を害し、夫を尻に敷き、我が面に振舞ふ

ものである、面が凹んで額の窄むものはたとへ富有の家に嫁しても貧人になり下る、額が尖つて鼻の縮むものは下賤で貧乏である、項が細く馬の首のやうに長いものは夫を尅してその夫は早く世を去り、或は夫縁なくして處女のまま、トウ立つものである、足が闊くして脚の薄いものは貧寒で女子ながらも四方に奔走せねば生活の出来ぬものである。身體が扁平で硬い毛の生ずるものは頑固である上に孤獨である、腋の下に硬い毛の生ずるものは卑賤を商賣をするやうになる、肉が粗く骨の硬いものは一生寒賤である、唇が厚くして息の臭いものは窮苦の境に居るものである、聲が小さくして裂けたやうなものは財がなく厄が多い人である、口を掩ふて笑ふものは密通などしかねまじき人である、坐つて膝を揺がすものは淫亂である、乳頭の小さなものは子もなく家には財もない、乳首の白いものは子があつても子が育たない、胸が高くして臀部の凹むものは一生下女奉公をする、結婚しても永續しがしない、腰が二つに折れて項の短かいものは孤獨の苦しみがある、行く事奔馬のやうな女は夫を尅し且下賤である、面が白くして薄べつたたいものは若くして寡婦となり、又子が無い、或は幾度か夫をかへるものである。目の上に羅紋（網のやうな紋）あるものは夫が非業に死し子が夭死する目の下に豎の理紋あるものは孤孀となり、その上に鬮子がない、額に横紋の多い婦人は貧苦であつて夫縁が幾度も變る、目の上に斜紋あるものは嫁して

から情人と逃げ出すものである、鼻の孔から紋の出ているものは終生貧困である、夫座（年上の傍ら涙堂の下になる鼻の上部の横手である）鈞のやうな紋のあるものは淫奔で盗みをする女である、夫座に立筋の紋あるものは情夫のために傷害される事がある、人中に横紋あるものは十度嫁して十度ともその夫が死ぬものである。

【2】婦人淫慾の相——婦人は道を行くとき身體をくねらして行くのを欲しない、頭を動かすのを欲しない、脚を躍らすのを欲しない、かういふ態度のあるものを貴中の貧と云つて貴い身ながら見かけ倒しになり、實際は衣食に困つてゐるものである。若し賤しい身であるなれば天死する、面が紫色をしてゐるもの黄の色をしてゐるもの黒い色をしてゐるものなどは、皆夫を妨げ子を害するものであつて、その夫は不運となるか病態になるかする、子供も亦次々と死んで行くものである。且淫慾が強く或は花柳病子宮病などに罹つて悩むものである、手が細く竹槍のやうなものや却つて福祿があるものである、唇が齒を蓋しないものは産難がある、乳が潤つて黒く且垂れたものは子が多い、乳頭が棗の實のやうなものは貴い子を生む、白くして窄むものは貧にして子がない、面が満月のやうで聲が清徹なものは貴い婦人である、面の上に痣や黒子のないものはよい頭に凸凹の骨のないのがよい、頬や痣や黒子のあるものは孤寡（やま）でなければ貧である、言はざるに

先だつて笑ふものは財利の觀念が薄い、物を言ひながら他所を眺めまわし、人と語りながら衣服の端を拵りまわし、或は頭を垂れて低く答へ、或は爪を以て齒の先を琴のやうに撥くものなどは何れも淫慾の強い女である、聲が男のやうで、唇の廣いものは、孤獨で淫蕩である、股を揺がすものは淫蕩である、肉削れて頬骨の高いものは三人の夫が死ぬる、眼の深いものも夫が死す、黄に紫の色が印堂に起つて鼻頭に至るものは貴い子を孕む徴である、三陽（女は右の目の下）に青氣が起れば男の兒を孕む、三陰（女は左の目の下）が紅紫色なれば女の兒を孕む、黒く白く黄の色などの差すものは子供が母を見ないことがある。難産で母が死し子が残るものである。

○婦人の賤しい相は前に擧げたやうであるが、若顔長く額も亦長ければ夫を尅して子にも縁が薄く眉が荒く口が廣い者は精神が急である、このやうな人は到る處で仲介人なしに結婚する賤しい女である、婦人の髪が亂れ、顔に艶がなく額が斜で背が反り、身體が乾枯び聲が雄々しく更に男子のやうな骨を帯び、眼に魁剛星があれば丈夫も殺される、（丈夫も殺されるとはこのやうな婦人と結婚すると如何なる者でも非業に死するか破財するか病身となるか大不幸に陥るかするものである。）

○更に女の貧賤な相は、まづ胸が鳩のやうに飛び出て、尻が腰掛のやうに持上つてゐる。また

夫が逆運に陥るのは額が出て兩頬が出て居る者である、夫に離れる者は額が凸凹で平らかでない女が三度も嫁入するやうな者は男のやうな聲をする、それでなくともかうした女性の一生は安かでない。多くは所謂孤獨性である、無暗に頭を掻いたり、衣紋を繕つたりする者は仲介者なしに結婚するものである、顔を上に舉げて眼を見開き、斜に人の顔を見る者は子縁に薄い、子供があつても力にならぬ。顎を襟にうづめて、爪を嚙んだりする者は花柳界に入る者である。

【3】 九つの美——凡そ女性に「九つの美」なるものがある、(一)は頭が圓く額が平らかである事(二)は骨が細く皮が滑すべする事、(三)は唇が紅色をして齒の白い事、(四)は眉が長くして目の秀で、ゐる事、(五)は指が纖かくして掌が厚く、且手の紋が細かくして糸のやうである事、(六)は聲が小さくして圓く、目清く流泉のやうである事、(七)は笑つて媚を見ず、口から齒の露はれない事、(八)は歩行が緩やかであり、坐臥が閑雅である事、(九)は神氣が清和で、皮膚が自ら香潔である事である。

【4】 九つの惡——これと反對に女性に「九惡」なるものがある、九つの惡である、今それを云へば(一)は醜い面で頬が高い事、これが一惡であつて夫を尅し、夫の縁が淺く結婚しても幾度か夫に去られるものである、(二)は結喉の高いものこれを二惡と云ひ、その人自身損禍に罹り、怪我

過ち不幸の死などに逢ふものである、(三)は蓬のやうな頭をしたもの、之を三惡と云ひ下賤の徵である、(四)は蛇のやうにシネクネ歩み雀のやうにチョン／＼行く者、これを四惡と云ひ、貧賤の徵である、(五)は眉と眉とが連なつてゐるもの、これを五惡と云ひ、姉妹縁も悪く、時には夫や舅姑に合はず、孤獨となり窮迫の生涯を送るものである、(六)は鼻の上に鈎のやうな紋のあるもの、之を六惡と云ひ、夫縁悪く、結婚すれば夫を尅して或は夫が病身となり、不遇に陥り、窮迫に至るものである、(七)は眼の玉(水晶體)が小さく四方が白く(鞏膜が廣い)ギョロリとしてゐるもの、之を七惡と云ひ、その夫は非業に死し、或は自己が難産又は怪我過ちなどにて死し或は劍難をうけることのある相である、(八)は性質が狡く聲が雄々しいもの、之を八惡と云ひ性質剛情に過ぎ、嫌だと思へば結婚した許りでも飛出し、幾度か夫を替へ平然としてゐるものである、(九)は毛髪が蝶螺のやうに卷くもの、之を九惡と云ひ、子を尅し、我子に向つてガミ／＼云ひ、或は罪もなきに叱り飛ばし、殴りつけなどする母性愛のないものである。

【5】 婦人薄縁の相——婦人の相は、まづ第一に顔の三停(顔の上中下)が平等でなければならぬ、五岳(額、兩頬、鼻、顎)が端正でなければならぬ、かくの如き婦人は精神が澄徹し、舉止が注洋であり、器量が寛大であり、嚴肅を式藏し、聲音が清响し、言葉に文章があるものである。

更に唇が紅色をなし、齒が白く、皮膚が滑らかであり、體に香氣があり、眉目が秀で、媚があり指が尖り髪が長く、山根(鼻の附根)がまつ直であり、額が圓く、頤(あご)が豐厚であり、背腰が魏昂し、坐れば石のやうに動かす、行けば巨船のやうにゆるくと歩み、乳が垂れて大きく、臍が深く指が隠れ、面が用の字の如く、手が細く柔らかで皮を剥いた筍のやうであるのはこれ婦人の最も賢良なるものである。これに反して婦人の忌むべきは最も聲の雄々しく男性的なのを恐れる、聲と眼とはこれ人の精神の表はれである、五岳の正しくないのはよくない、耳、目、鼻、口の均整でないのはよくない、三停ともびしやんこなのはよくない、眉毛が薄くバラ／＼なのはよくない。顔の下部が突出して天を仰いでゐるやうなのはいけない、頭部や額が大きく顎(地閣)の瘦せたものはいけない、幾度か夫の縁が變るものである。又乳が小さく臍の出たのはよくない。掌が凹んぞ蓮沼のやうなのはよくない。その外の凶相は大凡前に説いた通りで、貧窮ならずとも皆凡庸の婦人である。

○婦人の相のよいのは前にも述べた通り、男子に比して奇異あるものではない、骨が秀で、峻峭なのは神色に威儀があつて高貴の夫人となるものである。五岳の明朗なのは、持重して貞潔である、口が小さく丹を含むやうであり、音聲が澄み、背圓く肩が厚く、頤(顎の先)が豊かで

頤が重なり、歩む時は塵をも動かさぬやうであり、笑つて齒を藏し、法令が口を過ぎ、語に癡(こぼれ)がないものはこれ女性の奇特な相である。若し子を得ようとするならば乳頭が紫で下を向くものを求めなければならぬ、白くして上を向くものには子がなく、臉が薄くして媚のみあつて威のないものは淫濫である。髮際の高いものは結婚せぬ中から寡宿である、結婚すれば夫を害して不遇となり、或は幾度か縁が變るものである、人中が平らかで筋のないものは年老ひてから怪我傷害などにかゝる、印堂(兩眉の間)が紅色をして明るれば夫を助けて家を富し、又夫が出世をする、目頭の下が赤く黒ければ之は勝手に夫を求め自由結婚をする徴である、奸門(目尻)の色がよく光澤があれば夫は健康で業を盛んにする、神氣が足り指が尖れば聰明にして壽命が永い、背が圓くて腰が厚く手が白ければ夫を扶けて家を起す婦人である、顔が正面に開き聲が静かなれば淑徳のある女性である、山根(鼻の附根)が聳えれば夫を助け子が旺んとなり幸福な生涯を送るものである、失意の時に人に對して恨怨を想ふものは、遠大の人でない、志を得た時人に向つて誇るのは賢良の女性でない、貧窮な境遇にある賤女は胸が突出してゐなければ必ず聲が高いものである、用もないのに忙しくなくしてゐるものである、これらは又淫深な女性か藝娼妓などである。之等の女性は多く生目が荒く面に細かいものである、皮膚が滑らかで面が圓く口の小さな者

はたとへ賤業をしても、後には主婦となつて夫婦となつて夫妻睦ましく繁榮するに至るものである。皮膚が秀滑であり、舉止の穩かなものは妻たる資格がある。かやうな女性は精神も安らかな氣概も清く揚るものである。準頭（鼻の頭）の豊かなものは家屋敷を廣め、目の下にこんもりした肉が現はれ、ば子孫が榮え家に喜慶がある。臥蠶（目の縁）が明朗で紫黄色があれば家を興す人である。小鼻が豊肥で紅の光であり、手が筍の皮を剝いたやうなれば伶俐であつて手藝がある。面が満月のやうな婦人は好き家に住んで子孫と喜びを分つものである。之に反し額が高く額が瘤のやうになつてゐれば子縁もなく、夫は不遇となり、或は早く寡婦となるものである。坐つてまつ直に人を見るものは財を蓄み家を富ます人である。唇軽く舌の薄い人は嘘言が多い、脚が長く臀の大きなものは平生自分の身を顧みることをしてしない。

○眼の玉が上瞼に寄り、下に白眼が出で頬骨が出るか又は力のないものは嫁して間もなく寡婦となり又幾度か夫縁の變るものである。聲が男のやうに太く、顔が途中で凹んだものは妻となつて空聞を守るものであり、或は一生妾となつて暮すものである。顔が曲つて正しくないものは内面淫慾が強く外では性慾に淡泊なる如く粧ふものである。歩行に正しくないものは外面によく内心に深い考へを持つてゐるものである。再嫁する女は必ず頭部が大きいか額が廣いか口が大きい

か眉が大きいか、鼻が鈎のやうな大きいかである。女性の力のすぎたのはよくない。女の姿の弱々しいのもよくない、姿の見榮などはどうでも、媚あり、態あるものが最も夫婦縁によいのである。額の廣いものは女には必ず母系の再縁者がある。夫を尅して不遇とするのは聲が粗く骨が粗い、髪が濃くして額の闊いものは三度嫁しても尙縁が定まらない、眼が反つて聲の硬いものはたとへ七人の夫を持ちかへても納まる所がないものである。婦女の口の闊いのは――が闊く、先に富みて後に貧となり、夫は職を失ふて苦しむものである。女は必ず背が闊い女は必ず秀才を得て一生幸福に暮すものである。女の身體の軽いものは賤しい、身が肥えて肉の重いものは陰相であつて福を得られる、女の女形にして陽相なのは最も宜しくない、男形で陰相なものは衣食に豊かである、唇が紅色をしてゐれば夫を益し子を益して一家幸福である。肉多くして骨の細いものは永く花柳界にあるものである。眉が三ヶ月のやうなものは酒席をあつせんする女である、眼光が酔つたやうな女は幾度も男を取かへるものである。顔が桃の花のやうで眉が柳の葉のやうなものは淫行が強く人倫の道をも顧みないことをする、男の癖に菩薩のやうな顔をしてゐるものがその相手である。また互に刑尅して艱難をうけるものである。人に逢つた時髪を撫でたり衣紋を繕つたりする女は表面嚴格にしてゐても内心は惚れて貰ひたいと思つたり、惚れてみようとしたり

するものである。平常戸に倚りかゝつて指を咬んでゐる様な女は誘惑され易いものである、小鼻のしまらない女は衣服も澤山持てない、鼻の孔の天井を向くのは衣食にも困るものである、鼻が尖つて額が低ければ一生妾奉公でもしなければならぬ、手が粗く足の大きなものは一生下女奉公でもしなければならぬ、眼が小さくして神の濁るものは貧乏な人である、流し目に物を見、唇が尖つてゐるものは誰でも構はず約束する輕薄のものである、面が黒くして霧を吹いたやうなものは常に病氣になやむものである。額に垢の溜つてゐるものは盜賊のために暴行をうけたりするところがある、奸門(目尻)の白いものは夫婦仲も睦まじい。

婦人の吉相を相するにはよくその態度や精神を見なければならぬ、立居振舞に塵も動かさぬやうであり、笑へば温かな風が吹いて餘韻後にも残るやうであり、身體の堂々としてゐるものなどは特に貴い女性である。また神氣に威嚴があり、眼の黒白が明らかであり、髪の毛が青々として素直であり、聲が激發しないで餘韻があるものは、子も伶俐であり夫も榮えて一生安樂である、座ればドツシリとして山のやうであり、歩けば緩々として龜が水を出て歩くやうであり、髪が清く額が圓く神氣の十分なものは夫も榮え子も貴く一家も繁昌するものである、母としてよき努めをするやうなものはいつまでも髪が黒くなければならぬ、山根(鼻の附根)が聳え印堂(眉の間)の

廣いものは自然福貴であつてその夫も社會に顯はれる、腰が厚く背が圓いのはこれ福のある姿であつてその兒は早く發達して立派なものになる、面が満月のやうな者は老ゆるに従つて榮華がある、瘦せてゐるものは老ゆるに従つて貧乏となる。

【6】女子短命の相——女子の短命の相は、まづ腰から曲つて身體が肥え骨が細く、ブヨ／＼として柔かな者、それは貧相でもある、白眼が多く眼珠が黄色く、歩行の亂れるもの、唇が反り返つて齒が露はれ聲に響きのないもの、かよふなものは壽命は短かく三十才臺で生命を終る者が多い、兩目に神がなく耳が低い者は人の妻たることも出來ずして青春の中に生命を終る事がある、嫁しても早く墳墓の人となる、骨が少くて肉の多い者も同様である。鼻筋が通らず鼻柱のないものも短命である、人中(鼻の下の溝)の短かく兩眉の黄なるもの、形が濁つて神が凝り、言葉に艶のない者、かういふ相のものも短命である。

こゝに神氣といふのは、まづその人から發する自然の氣とでもいへるものである、此の氣には亂れたるものがあり、浮んでゐるものがあり、離れてゐるものがある、かよふな相の者は生命が永くない、面が黒くして耳の白いものは財が生じて神氣も順調であるから不幸はない、之に反して顔が白く耳の黒い者はその夫が財産を減じ、或は損害のある時で、二ヶ月の中にはその事があ

る。夏秋に面が白く耳の黒いのは大凶である、冬も亦不吉である、婦人の耳は紅くて顔の白いのがよいがそれは淫慾が強い、氣色が紅く顔が圓く耳の白いのは貴く、且長命である。眼が黒くして光る者は淫賤である、面が白く齒の白い者は富貴である。

【7】婦人七十二賤——婦人に七十二賤なるものがある。七十二箇條の賤しき相であつて、その中の一件があつても賤しく、或は色慾が強く淫奔である。その箇條は次の通りである。

兩眼に光の浮ぶもの、桃の花のやうな顔、皮膚に粉が吹いてゐる者、血が華色をしてゐない者、肉が錦のやうなもの、皮膚が滑かで油のやうなもの、顔に斑點そばだの多い者、眼の角が下に垂れるもの、物いふ前にまづ笑ふもの、手を動かしたり頭を揺つたりする者、兩頬が剝れたやうな者、顔の中央が陥つた者、面の肉が堆く浮き上つてゐるもの、眼に露があつて白く光るもの、口や唇が自然に動くもの、口の角に紋が生ずるもの、鶯のやうに歩き鴨のやうに歩むもの、頭をあげ目を側たてゝ見る者、首を曲て人を斜めに偷み見る者、誰も居ないのに一人言を云つてゐるもの、腹が凹んで胸が張つてゐるもの、腰が細くて肩が細々としてゐるもの、臍が出て下に近い者、乳首が白くて下に向いてゐるもの、皮に細かな皺のあるもの、顔が大きくして鼻の小さい者、額が尖つて脚を揺がすもの、齒が白玉のやうに白いもの、唇が白くして厚くない者、唇が青くして藍の

やうなもの、一足歩くのに三たびも身體をゆする者、一言をいふのに三度も中絶する者、笑ひ聲が馬の嘶くやうなもの、言語が浮いてブツ／＼いふやうなもの、頭が大きくして髪のないもの、鶴のやうに細い脚で腰に肉のないもの、雀のやうに行くもの、談笑しながらしきりにつかへる者、唇部に肉なく腮の短かいもの、人を見れば面を掩ふもの、身體が風吹かれる柳のやうにシネクネして細い者——毛がないもの、——で泣くもの、頭のでべんに骨が立ち耳が尖つたもの、頭を縮ませて舌を出したりするもの、顎を引込めて指を咬へたりするもの、——毛が草のやうに生へてゐるもの、顔が長く眼の玉のグリ／＼したものの、齒で衣服の端を嚙んだりするもの、あくびをしては腰を延したりするもの、——がキラ／＼と光るもの、頭を下げて歩くもの、キヨロ／＼四方を睨め廻して歩くもの、坐つてもじつとしてゐないもの、腿の上に毛の生へてゐる者、舌を尖らして唇をなめ廻すもの、立つたり居たり迷つて許りゐるやうなもの、立てば身體のまつ直にならぬ者、額が廣く鬢の深いもの、鼠のやうな黄いろな小さい齒があつて鬼齒の生へてゐるもの、性情の忽ち變ずるもの、馬が蹄をかへるやうに履物を早く減して取かへるもの、身が長くて頸の短かいもの、鼻が天井を向いてゐるもの、眼を閉ち眉毛をよせるもの、蛇のやうにシネクネ行き鼠のやうに早く物を食ふもの、項が細くて眉毛のバラ／＼なもの、指が短かくて腰の曲るもの、

絶えず物を喰べてゐるもの、何事も無いのに突然驚いたりするもの、頭が曲つて額のつほまるもの、背が割れたやうになり腹の小さいもの、夢を見てうなつたり泣いたりする者。

かような女性は七十二賤といつて、その中の一つがあつても凶相をなすのである。

【8】婦人三十六刑傷——また三十六ヶ條の刑傷する相がある、刑傷といふのはその女と結婚すると夫が運勢を傷けられて不幸になり、或はその子が尅されて早く死んだりするものである、その相は次の如くである。

髪の毛が黄色で片手で握るほどであるもの、眼の玉が赤いか黄いろなもの、頬骨だけが顔中で高いもの、額の真中に旋螺（まがひま）のあるもの、額が高くして顔の凹むもの、額に早く筋や紋の現はれるもの、眉毛の間に縦に針のやうな筋の出るもの、少女の中に髪の毛が薄くなるもの、骨が硬く皮がピンと張つてゐるもの、顔が長くして口の大きなもの、顔が瘦せて筋の現はれてゐるもの、額に三つ骨が現はれてゐるもの、耳が反つて煎餅でもつけたやうに輪のないもの、顔が尖つて腰の窄むもの、面がはつきりせず泥のやうなもの、山根（鼻の附根）が陥つたもの、地閣（顎）が偏斜したもの、頭のてつ邊に骨が立つもの、聲が太く雷のやうなもの、性急で火のやうなもの、神が濁り氣が粗いもの、顔の上部が大きく下部の小さなもの、皮膚に粉が吹いたやうなもの、鼻筋に

骨の起るもの、肉が冷たくて水のやうなもの、骨が粗くて手の大きなもの、肩が偏斜してゐるもの、眼が大きくして腫の圓いもの、喉結（のどむす）や齒の大なるもの、髪の毛も骨も硬いもの、寝言をいふもの、口が火を吹くやうに反つてゐるもの、鼻の内に毛の生へるもの、骨が起つて腮（おとこ）の高いもの、命門（耳の穴の前）に骨の起るもの、——いもの、——大聲を出して——るもの、顔に雲母（うんぼ）を散らしたやうな者、それを三十六刑傷と云つて妻としても母としても終生満足を得ない婦人の相とする。

【9】婦人二十四孤——また婦人に二十四孤なるものがある、孤獨となる二十四箇條であつて、その中の一つがあつても夫に別れ、子がなく、また生涯貧苦をうけるものである。

眉毛がないものは子がなく、聲が破れたやうなのは孤獨である、三十才前に不幸に陥る、兩方の眼が深く凹んだものには子がなく、鼻の低く陥つたものには子がなく、あつても役に立たぬ、火を吹くやうな口のものも孤獨である、臍が小さく淺く出てゐるものは子がなく、股の透いてゐるものは子がなく、髪が尺に満たぬ者は子がなく、腰が圓く三廻りに及ぶものは子がなく、これには何れも子があつても役に立たぬ、更に肉が浮いて血の滯るもの、肉が重くて泥のやうなもの、顔一帯に色が沈んでゐるもの、皮膚がうすく骨の細いもの、肉が多く骨の少いもの、眼の下が墨のやうに黒いもの、腹が窪み臀に肉のない者、耳が小さくて顔の尖るもの、頬骨が高くて腮（おとこ）のな

いもの、形が男子に類するもの、唇が白く舌の青いもの、眼の黑白がはつきりせぬもの。かやうな者は皆孤獨の人であつて、たとへ子があつても力とならず晩年はよる邊なき身にもなるものである。

一九、妊孕及嬰兒の相

女子の相を見てその子がよく育つか育たぬかを知るには、先にその兒が男であるや女であるやを知らなければならぬ。まづ胎中にある兒の男兒なりや女子なりやを見るには婦人の目の下の色が變る、此部が黒く青い時は女兒を生む、此部が赤く黄なる時は男兒を生むものである。此部が塵か泥かで汚れたやうな時には産厄がある。赤黒い時も産厄がある、額が黄いろく明るい時は安産する。人中(鼻の下の筋)に紫黒色の發する時は雙子を孕む。又婦人の顔の左側が青い時は男兒を生み、右側の赤い時は女兒を生むものである。

また妊婦の左脚のまづ動く時は男兒であり、右脚のまづ動く時は女兒である。目の下が紫色の時は貴い子を生み、鼻の上が黄いろで明朗な時も貴い子を生みものである。

妊婦の左の掌の青く紅い時は男兒を生み、右の掌の青く紅い時は女兒を生む、色が明かで艶のあ

る時は安産であり、枯れてカサ／＼になつたやうな時は産難がある。

婦人の目が飛び出し齒の現はれたものは産に重い、掌の母指によつた方が黒い時も産厄がある。準頭(鼻の頭)紅く潤ひのある時も産に安く、その子は福があつて家を起すものである。

次に嬰兒の相を見るには、後頭部、鼻の附根、それからその兒の精神の強弱、聲などを見て考へなければならぬ。後頭部に骨の起つたものは弱さうでも長生する人となり、骨のないものは強さうでも夭折する、鼻の附根の高い者は壽命があるが、此部の凹んだものは多くは十七八才に夭折する頭の骨の圓く聳ゆる者は育て易く、然らざる者は育て難い、額が方形(角ばり)て顔の長いものは満足に育つて後に吉祥に至るものである、鼻の附根(山根)に青い氣が出た者は決して生育しない、鼻の上に赤い色の生じたものは必ず血の病ひにかゝる、陰囊がダラリと垂れた子は弱い胡桃のやうにゞつたものは丈夫な兒である、顔の肉が浮き上つたやうな兒は、たとへ健康でも虚花となつて終るものである。目が緩んでボンヤリとした者は壽命がない、聲をあげて泣く時、いつまでもその聲の續くものは壽命がある。泣くと同時に息を引いて聲が途切れ、その時又腹が張り上るものは育ち難い、たとへ育つても壽命が短かい。額に旋毛のあるものは少年の中から人に尊ばれ、鼻のひしやげたものは少年の中から悲しみに遇ふものである。額の髮際の下つて狭いものは孤獨の子であるか、

或は早く父を失ふか、父が無氣力なるか、夭折するか、父の力をうけ難いものであり、髮際の高いものは聰明であり、早く發達するものである。

聲が短かく氣の辛^い立つものは育ち難く、又永生しない、頭の鉢の合はないものは八才頃に生命を失ふことがある。頭の髪が薄いものは夭折^{わだか}する、陰部がかくれて無きが如きものは夭折する、身體がたえず汗ばんで血の浮くものは夭折する。身が軽くて軟かな者は夭折する、臍が小さくて底いものは夭折する、小便が細くまつ直に走る者は夭折する、早言葉で物を言ひ、早く物を食べ、早く歩むものは夭折する、啼き聲が散ばるものは成人しない、常に手足をもがくものも長命でもない、緩くり語るものは貴い人となる、八才になつて衣服を整へるものは長壽であつて貴い、衣服を愛せず立居が汚なく、音聲の清くないものは長く貧乏するものである。口の邊に永く涎を垂してゐる者は下男下女にしかたれない、陰が筒を截つたやうなものは貴い、陽が尖り、又大なるものは愚鈍であるか不幸であるか賤しいものである。

更に貴賤の相を見れば小兒の啼聲が鴉に似たやうなものは兄弟ともに榮華する。小兒の啼聲が歌をうたうやうなものは孤獨であつて兄弟もない、又父を傷つて早く父に別れ又母に離れる、波が破れるやうなものはその家が潰れて不幸となる。顔の中央が凹んだものは家に居り難く長ずれば奉公

などに出るものである。眼の玉が大きく飛び出たものは五六才で夭折する、身體の下が軽いやうであり上部が重いやうである子は養子になる。顔の上部が潤く下部の尖るものもさうである、陰陽が黒く皮の堅實なる者は長壽にして富貴の人となるものである、身體の肉が緊つて浮上らぬ者は富んで壽命が永い、耳の門の大きなものは富貴な人となり且知識が深い、聲が亮々として響くものは壽命がある、好く遊び戯る、ものは壽命がある、よく遊ばざるものは神氣不足し病が多く、氣の弱い者は壽命がない、項^{かむ}の下に二本の筋のあるものは富みて且壽命が長い、頭の上部圓くして骨の起る者は幼年時代も險がなく且吉祥に至るの人である。嬰兒は畢竟、肉の締つて泣き聲の連篇と續くのがよく、やゝ長じては言語動作の遅きがよい、チョコ／＼したものは、年よりは早く智慧つくもの、眼の鋭いもの、聲を中斷させて火のついたやうに吐くもの、怒り易き者、泣き易きものなどは何れも夭折する相であり、然らずとするも多病衰弱のものである。その外は別に掲げた夭折する人の相を参照されたい。(「人相の秘鑑」より)

五人相單語

二四二

〔一〕

- 眉の骨が高く起つて、ひげが燕尾のやうに左右に分れてゐるものは、多く子息を害する。
- 眼が大にして神の露出してゐるものは、幾度か監獄に入る。
- 鼻のまん中に節のあるものは家を破り、故郷を遠くはれて死する。
- 身體の肥えた人の面上が赤ければ、その人は性悪なることをたくらんでゐる。
- 瘦せた人の髪が黄なれば、その人は貪らんであり、殺ばつてあり亂暴である。
- 頭の鉢がないように小さく、えり元の迫つてゐるものは三十代で生命が終るものである。
- 襟くびがまん丸であり、頭が小さいものは一生成すなくして終るものであり、頭が小さくして襟元が丸くなければ、少年にして死するものである。
- 男女とも眼の中が黄いろなものは、性急であり、眼が大きくキラキラ光るものは監獄などに行くことがある。

- 眼の大なるものは、異性とのこだわり事のあるものである、謂ゆる女難がある、眼の團十郎が婦人關係人のために傷害されたことがあつたと思ふが、さうでなくとも眼の大なるものは、夫婦仲が悪いものである。
- 男子の眉細の細いものは、養子か、或は妻家の財力に依るか、又は妻の働きなどに依て生活するものである。
- 女の人の髪の濃く深いのは性慾に強い。これは男も同じである。
- 男女ともに咽喉の骨の高いのは、時に思ひがけぬ凶事などに見まはれることがある。
- 眉毛が軽くシヨボシヨボとして居り、口が大きく開くものは水難に遭ふ事がある。
- 耳の中にホクロのあるのも水難の相である、然し命門にある黒子は妨げがない。
- 眉の中にホクロを生ずるのも、水難の相、それにこの相のものは家庭が納まらぬものである。
- 男女とも髪の巻くものは好色で刑を犯すものである。
- 男女とも髪の黄いろなものは下品で、下流業に適する、身分の高いものにはなれない。女子は夫を尅する。
- 襟元の處、背の上の處に肉がうづ高くなり、眼の深きもの、髪の黄なるもの、この三つのもは

二四三

相尅のある形であつて、六親けん族いづれかその人命を犯して吉ならざるものである。

○眉の先がさばけて、ススキの様に散つたものは、一生運が通じないものである。

○口ひげの先がさばけてゐるものも、多く運に停滞のあるものである。

○眉の中に又毛が生じたもの、耳の形に大小にあるものなどは養子となつて出世するか、又は子運にわるき人がある。

○眼のひとみを動かさずに、顔だけ動かして人を見るものは、盗賊だとしてある。

○眉が垂れて耳の位置の眼より低いものは、妾腹の生れであるか、庶出の兒である。又は養子等である。

○女の耳に張りがなく、額の骨がこそけ落ち、又骨の粗きもの、この二つの相は妾となる相である。耳は稜のないものも同種とする、キクラゲの様な形をしてゐるものである。

○婦人が面を仰いでゐるものは、奸淫の心がある。

○男子が常に頭を垂れてゐるものは、貪慾であり酷薄である。

〔二〕

○身體が大きくして手の小さなものは、一生財が集まらない、身體が小さくして手の大なるものは

下愚の凡人である。

○皮膚がサメ皮の様であるものは家を起し、蛇の皮の様なものは家を破る、サメ皮の様なものといふのは、皮膚の荒いもので、寒い時にそう氣立つ様なのをいふ、男女ともこういふ皮膚を持つたものは苦勞をするものであるが、晩年になると無一物から自然財が起つて、幸福になるものである、蛇の皮の様なものはスベくしたもので、男子は遊蕩をなし、女子は時に娼婦となり下流業に身を投ずるものである。

○面の大きな女は多く不幸なものである。

○眼の丸い女は夫の母とは合はない。

○口が尖つて鼻が折れた様な男は下男の格であつて、支那では一日に三度もひつばたかないと動かぬ奴だとしてある、顔が大きくて鼻の小さなものも下僕の生れだとしてある、然しこの相のものはよく主家に仕へて忠義をいたし、家を盛んにするものである。

○口が廣くして唇の赤いものは、よく飲食するものである。

○腹が小さくして背の陥るものは、一生祿がない、腹の小なるものを俗に犬腹といふ、財なき人である。

- 目が紅くしてよく語るものは、好色かぎりなき人である。
- 寝てゐて寝言をいふものは、一生方向の定まらぬものである。
- 唇のうすく、ペラペラ動くものは、奸邪の心があり、且財の集まらぬものである。又時には不信なる行ひがある。
- 唇の常に青いものは、老年になつてからルンペンなどになり易い。
- 女人の汗多きものは、一生苦勞をする、然し全く汗のないものは子供がない。汗に香のあるものは子が貴い、汗の濁るものは子が賤しい、これは結果から見ても上等な生活をするものは汗が香ばしく、下等な生活をするものは汗が香ばしくないからであるともいへる、又これは精神的にも考へられる。
- 自ら云ひ自から語るもの、即ち獨り言をいふものは運が開かず、下品な生活をするものであり、少青年にあつては永生きしないものである。
- 奸門に十字の紋のあるものは、妻に小言をいつただけでは足りず打ちたゞきするものである。
- 女人の頬骨が高く、眼の角が上るものは、何かといふと主人に手向ひして、臺所から箒をかつぎ出してくる人である。

- 耳がうすく、鼻柱が折れ、唇が上向き、胸が張り出したものは下賤で、生涯人に使はれるものである、その様なものがかりに主人になり、主婦になつたとて永續する事はない。
- 少年の眼がチラ／＼して所謂神の散するものは、壽命が短かく、老年になつて頭部の皮膚のかわくものも死が近く、女人の唇の白いものは病があり、青くなると身死し又唇の常に白いものは兒がなく、女の唇の反るものは夫を尅すとしてある。
- 女人の下唇が出てゐるものは、一生口やかましく死ぬまでやめない上唇が下唇よりも出てゐるものは兒なく又賢ならざるものである。
- 女人の聲に韻のないものは賤しき主どり、男子の聲に韻のないのは生涯産をなす事ができない、聲の澄んだものは財あつて人となり、聲の濁れるものは財なくして生長し、或は一たび家財を失へる人である。

【三】

- 足の指の短かいもの、足の平の土ふますの深いもの、足に骨の現はれたもの、この三つの一つがあつても貧賤である。

○足に肉があり、足に軟毛がはへてゐるものは一生安樂である、足の色が紅潤なものは多く貴を主とする。

○耳の内の色が青いものは肺病である。

○男子の髪の荒いものは犯刑の相である、女子の髪の粗なるものは夫を刑し子を害する、女子の色の白いものは美人だとばかりいへない、多く傷害の難のあるものである。

○身が白く面の黄いろいものは久しい間困窮であり、身が黄色で面の白いものは久しからずして身が榮える。

○女人の掌上に紋の深いものは多くの子がある。女人の手に節の立つものは一生辛勞する、又その身分も卑しい。

○女人の顔のまるきものはよき兒を生む、男子の額のそげたものは一生の間顯達することができな

5。○人が長じて手の短かいのは一生器をなさない、魚尾紋が直ちに天倉に上るものは白手空拳にして産を成す。

○女人の齒が唇から出るものは刑傷をつかさどり、内に深く入るものは孤孀(ヤモメ)である。

○鬚が燕尾の様に左右に分れたものは兒を害し、あつても早く失ふことあり、老年になつてから面が白く、髪や鬚が赤く、又鬚が羊の鬚の様であるものなどは、皆兒を害するものであり、又全く鬚のないものも兒運に悪しきものである。

○老年になつてから、面が紅く耳が白いのは兒が貴く、老來房事の多いものは壽命の永いものである、それだけエネルギーがあるわけである。又兒の貴きを主さざる、老人になつてから鬚の落ちるものは兒を尅するものであり、年老ひても頭の毛が房々してゐるものは運がとどこほり、頭の早く禿げるものは、運がそこだけで止る。女の髪の濃いのは夫を尅する星があるが、然し早く毛のうすくなるのもいけない、程よくあつて禿げないのは、これ又壽命の永いしるしである。

○××の色の黒いものは、早く親となり、色の白いものは子が遅い、前者は健康であり、後者は不健康である。準頭の偏するものは兒が貴とく、脚が削つた様に小さいものは後代が續かない、但血色が潤澤であれば聊かよろしい。

○鼻の折れた様なものは父母と親します、鼻に節のあるのは祖業を破る、鼻のみが獨り高いのも同様である○痣の上に毛の生ずるものは英傑であり、乳の邊に毛の數へる程生ずるのは貴い子があ

- 女人の面くろく身の白いものは賤しい、面にツバカスがあつて身の青いのも賤しい。
- 女相瘦せて唇の紅いものは子を生んで群をなし、瘦せたる人唇白いものは壽命が短い。
- 瘦人の貌の白いものは心の狼なるを主どり、肥人の紅白なるは心慈なるを主どる。
- 少年の皮膚に黒斑が生ずると死をつかさどる。
- 小兒の腰がひろいのは必ず壽命が長い。
- 老人になつて面に斑の生ずるは壽がある。斑は高まつて黒いのがよい、平らで黄色なのは貧窮である。
- 凡そ人の肉を生ずるのは先づ腰の上から起るものである腰は妻財壽命である、腰細く、胸上面上に肉の上るのはよろしきをなさない。
- 四肢のかはくものは一年の内に死がくる事がある、四肢がうるほへば二年の中に富があるものである。
- 老ひて髪が黒くなり、齒が生ずるのは壽のあるものであるが、必ず子孫を刑尅し、孤獨の人をなすものである。
- 額の角に旋毛のあるものは過房の人である、額に亂紋の多いのも過房の人である。

- 山林の部に一痣があれば大財を得る。
- 痣の上に二本の毛が生ずれば貴子を生む。
- 臥蠶が紫色に發すれば貴子を生む。
- 口角の上に小さい黒子があれば貴子を生む、口角の下に黒子があれば子を尅す。
- 奸門に雜色あれば娼婦をめとつて妻妾とする。
- 年壽(鼻上に)一陷一缺あり、或は一紋一痕あれば成敗することが一度あり、二紋あれば二度の成敗がある。
- 十二亥の宮に白包が粟粒の如くに起れば、奴僕のために害に逢ふことがある。
- 眉間の上下に白包を生ずれば酒色によつて身を亡すことがある。

[四]

○凡そ人の子を生じ財を發するのは、ともに血が壯んにして氣が充實しなければならぬ、財も子孫もこれ皆妻財によつて發するのである、この關係は命理の式と同じであるこの二つのものが亂れるは妻を刑し子を尅し、しかして財が起らない、亂れたるものは色が潤ならず、氣が和さない、

即ち顔面にうるほひがなく、氣が和さなければ顔面にムラがある、眼の周圍、福堂の青黒きものなどはこれ破相の人である、これは奸門、臥蚕一ヶ所のみ用をなすのではない、氣色全體が又用となるのである、また氣色の二字が妙をなし、精神が要をなすのである、而して滿面の部位中、印堂がことにその重きをなすのである、印堂のいかんはその人の一身一世を管理するものである故に各様式と共に印堂をも見るべきである。

○山根に一の横紋があれば祖業をはなれたものであり、その家が滅びるものである、二根あれば六親眷族にはなれてしまふものである、三根あればかへつて自手空拳にして家を成すものである。○口を水となす、夜、漕々たるはいけない、これは即ち小水であり、小さな口である、この口は老人にはよい、少年にしてはいけない、故に口の漕々たるもの（大きなもの）は年少にして勞苦するのである、老人期に入ればよい、三十二歳にして死することがある、五十五歳にして死することがある、六十六歳にして死することがある、古書に眉の毫（長き毛）のあるのは耳に毫のあるのに如かない、耳に毫毛のあるのは、項（うなじ）に線（すぢ）のあるのに如かない、夜、漕々たるに如かない、夜、漕々たるもの、即ち口の大きなものは老人になつて足の病が起り、また腹部以下の疾病をなすものである。

○老ひて睡多ければ死し、少年にして睡多ければ愚である。

○眼邊に包を生ずれば子女を刑し、滿面に包を生ずれば妻をうしなひ子を損ずる。

○女子が鴨の脚のやうであれば生涯下女奉公をする、男人が鴨脚であれば一生下愚の人である、男人の臍が淺ければ決して富める身とならない、女人の臍が淺ければ決して子を生まない、

○聲が忽然と燥鳴すれば重疾をつかさどり、乾韻となれば死を主どる。

○總じて氣色よろしきも唇の白いはよろしくない、唇紫黒なれば運に破れあり、或は重疾にかゝる。

○男女中年にして髪が落つれば老來最も苦あるものである。

○男子首長きものは青年勞苦あり、女子首にこむは老ひて困窮する。

○額上に紋あるものは大破耗を主どる。

○少年にして髪白きは父母を刑し、大いに不利。

○魚尾に梅花紋のあるのは、妻によつて家を破り、直紋あるものは大いに困窮する。

○準頭が南方に偏するのは忌まない、南方は土である、準頭の上に向くものである、北方に偏するのはよくない下に垂れ降るものである、左方に偏するものは家を破り右方に偏するものは老來窮

する。

二五四

○鼻孔に一二毫(毛)の生ずるのは長者の長鎗をなす、毫多きものは糧にあまりがある、鼻毛を抜くのはよくない、倉庫に糧の餘りあるのはよい、井爐に長鎗があつても役に立たない、長鎗あるものは險がある。

○小鼻が薄くしてよく動くものは二世になつても財を集める望みがない、かへつて子が破れるものである。

○地閣に一處の紋の生ずるのは一處に田藏がある、二處紋の生ずるのは二處に田藏がある、田藏、別壯は五十歳すぎてこれを得られる。

○臥中大いに狂ひ呼ぶものは、悪人に遭ふて死することがある。

○常人にして伏して臥するものは死を主どる。

○臥中歡氣をもらすものは決して吉兆にあらず。

○臥中齒をかむものは子を害し妻を害す。

○臥中火を吹く如きものは少年悪死し、老來終りをよくせず。

○指の甲朝するもの(上向くもの)は孤獨を主どる、項内髮肉螺の如きものは大いに發財する。(頭の

テツペンにコブの如き骨のあるもの)。

○面に黒子を生ずる、上きは大いに宣し、貴を主どる、大なるもよろし、若し低くして小さきは壽命淺し。

○眼毛は軟かなるがよし、細かなるがよろし、多く亂れて草の如きは子孫賢ならず、毛なきは子孫不幸なり。

○食祿二倉に紋を生ずれば、老來貧を主どる。

六、黒子秘傳

○額

額とは眉から鼻の先までを指して言ひ主としては頬であり、それを正面といひ、家運を見る所とし、人相上三停では中停といふ場所に相當してゐる。即ち顔の中間に當る。

額は己れ自身に屬するところで自分の権力を見るに用ゆる、所謂額は權なりで、この文字は自己の權勢を重するが爲に作られたものであり、自然に自己を中心とした家庭の立場を見たり、それに伴ひて自己の運命を觀る場所である。(顔面圖參照)

額骨から耳の端に延びたものを玉梁骨といふが、これは腦の入れられた、額の部位なる屋根を受けてゐる大切な梁であるとする。首以上を一つの家とすれば、頭腦は屋根、額骨は土臺、中位は住居である故に、自己に屬する所以はこゝに在る。三才の人位といふのもこれである。

面上三停の中停にて、中年の運氣福壽を觀るのも又この部が自己に屬するからである。今額に屬するは印堂、山根、年上、壽上、準頭なる五部位に生ずる黒子を、大たい分り易く説明してみる。

○印堂部位 印堂は眉と眉との間、三分乃至五分の所最も重要な所で、神明はこゝに發生し、各個人終生の運命を支配する。

印堂の隣りの交鎖(眉の端)に黒子疵等があり、それを以て神明を破れば、刑獄を主る場所となり、戒慎の個所となる、次の眉毛はこれを靈室ともとなへ、細君が一家の産業に従事する意味であり、家庭に於ける食糧の原産地である。故に又その隣りの部位の髪の生へ際「山林」又は林中と共に貴ぶが、林中はわけて神佛を尊崇する地とし、次に「酒樽」の神酒が供へられその次は「精舎」(或は神光)と稱する神佛を祭る場所とし、印堂部位の横列中に入つてゐるが、之れは本部に記すやうに只名稱と意味の異なるだけである。又その次に嫁門ひんかどがあり、巫女まじむすめがこれに仕へる意(實は一種の妾のこと)その次は劫路かきろ、巷路、青路と稱する往來道路が附くのであるが、このやうに一々並ぶものでもない。これらは何れも眉毛の根であるが、此の中に入つた黒子で、その中央に位するものは富んで長命するするしとする。

眉にある黒子はみなそれぞれの部に吉凶があるが、それはその黒子の色の如何にもあり、又部位といふものはほんの僅かの差であるから、これを實際に示さぬとわかりかねる所もある。

○山根部位 山根は鼻の附根に當る。この部は一家の生存維持を示す。山根とは鼻を山に例へその

一番本、即ち裾であるからの稱である、こゝの障りは子孫の斷絶を主る。わけて此部に黒子があり、白色を帯べるものは官災がある。次の山根の左である、太陽、中陽、小陽、反対面の、大陰、中陰、小陰は子供を指し、魚尾と奸門は細君の位を示す、目尻の下にある黒子は少し吉なる理もあるが多くの凶である。目頭にあるものは俗に泣き黒子とも云ひ妻子死別の悲しみがある。目の端れの方の天倉は己れの家の金庫であり、天井も亦財寶の位置、天門は家に入出入する門、玄武は出で、修業をする場所、この山根の横列部位が一家の維持を示す所以であるが、此所にある黒子は何れにしても吉といふわけには行かない。

○年上部位 年上は山根のやゝ下方。この部位は自己の壯年時代を示して居り、自然にその人の壯年時代を観るところとなる。この部にある黒子の吉なるものはない。眼頭の下の方座妻座は結婚の如何を示す地であり、次で左の長男、中男、少男、右の長女中女少女(これは男子、女はこの反対)などの名稱があるが、いづれもこれは結婚によつて生じた子を養育する所に當る。そのために金匱が附屬してゐる。次に禁房は夫婦の寢所を指しこれを盜賊が附け覗ふ。そこで遊軍といふ保護役、即ち巡查が居て、事があればこれを『書上』げて玉堂に申上げるのである。玉堂は金馬玉堂の地といふことであつて上官の意味であり、顙骨の張つた所になる。従てこの金匱や禁房や盜賊やに黒い色

や白い色の黒子がついてゐれば凶事がある。赤い黒子は差支へない。

○壽上部位 壽上は鼻の先の少し上である。この部位は老年時代を延べてゐる、それで甲匱と稱するこれも金匱が壽上といふ主要個所に附き従つてゐる。つまり小鼻である。次の歸來は書信とか家人の出入を主り、堂上は己れの住居(子孫を入れる)正面を正面とし、正門としそれに更に權勢としてそこに在つて師長の權威を振ひ、脇に兄弟、外甥を控へさせて一門を形作る、即ち顙骨である。學堂はそれ等のものも教育する場所その業を卒へて命門といふ最後の地に於て一生を終るといふ順序になる。命門は耳の前。これらの部に悪しき色の黒子があれば、それぞれ害をなす。

○準頭部位 準頭(セツトウ)は鼻の頭で、自己の財福に對する位置を現はしてゐる、一方の小鼻の蘭臺は文官一方の小鼻は廷尉といひ武官で準頭を左右に守るを意味するが、高いのは臺蘭で低いのは廷尉(低位)である。法令は小鼻から出る鍼で之は一家の命令を發するところである。この部に悪しき黒子あれば短命を意味し或は凶死する。次の横列爐上、宮室は自己の住居を意味し、典御は召使ひであり、園倉は園庭、后閣は女人の居る別宅を云ふ。それに守門といふ警戒場所あり、隣りに兵卒あり、その賞罰を印綬にて主るのである。これで自分の家の組織は終つたことになる。

以上が顙の使命である。これに本づいてその部分に於ける氣色若くは黒子などの障りを觀察した

ならば凡そ推察されるであらう。即ち色澤悪く黒きか、白きか障りがあればその場所の主る使命は停滞したことになる發揮することが出来ないことになる。黒子の赤色なのは概して吉なるを示す。さて取まとめて黒子の部分的吉凶を示してみやう。

○(印堂)に眞黒子あるものは貴し、但し軍人には貴きに過ぐる爲め却て災難を受く。女子は又貴きに過ぐるものであり、夫を妨げたり離婚などの厄がある、或は又連れ合が不遇であつて女子自身の方でもつて一家を支へなければならぬやうなことになる。

それ等の理由から夫が強壯なれば妻は必ず病身であるか、又は夫に妾があつて孤閨を守る、妻が強壯なれば、夫は反對に不具であるか、若くは不遇にして働けないといふことが引き起されてくる、双黒子は父母夙に全からず。

○(交鎖)眉毛の生へ際、これに黒子があれば入獄の事を主る、又性剛であつて人の忠言を容れない。そのため官吏としては地位低く、然し宗教界に入ればかへつて達道の人となることが出来る。

○(蠶室)の黒子は産業なし。(眉毛の中)

○(林中)の黒子は神佛に信仰なし。(同上)

○(酒樽)の黒子は酒のために事を破る。(同上)

○(精舍)は信仰なし。(目頭の下)

眉中の黒子は幼にして水難に遇ふ。但し死せず、中年よりは技藝に達す。智能あり(女子は宜しからずして夫が害に遇ふ)眉上の黒子は貴官に登る。眉尖の黒子は女子は男子を伴ひて逃亡遠行することがある。

○(嬪門)目尻の上のほくろは妻女を主る、故に私通の厄あり(男子には又信仰心がある)

○(劫路)のほくろは賊入り易し、例へ黒子なきも色澤黒ずむ時は盜難の憂、常に伴ふ。(目尻の上)

○(巷路)のほくろは旅行にて遠行する時は必ず病厄あり。(同上)

○(青路)のほくろは官命にて旅行する場所なれば、黒子あらばその使命を果さず、或は出で、却て刑罰を受ける。(同上)

以上三個所は道路又は山林と名づけてこの部分に障りあるものは旅行によろしからず、若し白色出づるときは旅行中ばにして國へ歸るが如き不幸がある。

○(山根)のほくろは常に疾厄あり、また子孫斷絶することあり、四十一才にして男女共に大厄あり男子にありては妻を妨げ子を害す女子にありては孤獨を主る。(婚姻田宅兄弟のこと皆こゝを觀、黒子があれば妨害がある。)

○(太陽)(中陽)(少陽)(大陰)(中陰)(小陰)(何れも目の周圍)の黒子は男女宮と名づけて子孫に關係がある。故に一生の大切個所に相當しこの部の黒子は、凡そ三七八才にして男子は子女に對して女子は夫に關して大厄あり。

眼瞼に黒子ありて斜視するが如きは、男子は聰明なれども女子は姿淫最も激し、眼の上方に黒子ある者は竊盜の心持がある。

○(魚尾)目尻にあるほくろは姪亂を主る(女にあつては外狀は事無きが如くであつて、しかと心中は隠かならず非常に多情である。)

○(奸門)同じく目尻のほくろは妻の位と名づけ、私通或は淫蕩を主る(女子の貴賤は皆この場所を觀る)また盜難にかゝり易し。

○(天倉)目尻の後の黒子は貧賤を主る(またその財の出入にもこゝを觀て宜しく、黒子はそれを妨ぐ、女子はこの部黒子宜し必ず男兒五人あり。)

○(天井)同上のほくろは財帛を妨げ、種々の災厄起る(井戸に陥り川に溺れる等の厄はこゝの黒子が禍ひする。)

○(天門)同上のほくろは男子は婦女子と事起る。但し痣に毛あれば聰明達識の人である。

○(玄武)もみあげの所のほくろは學問成らず、また出家をすべからず。

○(年上)鼻の上の黒子は壽命を主る、故に病あり、若くは貧苦とす(また壯年時代に至ればその時代必ず持病に苦しむ)兄弟仲悪し。

○(夫座)(妻座)目頭のほくろは男女共相手を妨ぐ。

○(長男)目頭の後のほくろは長男の死を主る(長女)(中男)は長女(中男)は中男の死を主る。兄弟五六人の時はその中頃の者一人死す、(中女)は同様女子の方を主る。(右はいづれも精舎光殿など、稱する所の後、前の夫坐妻坐の後である。)

下瞼に在るは子孫繼ぎ難し。後目なきを主るなり。

○(少男)のほくろは小男の死を主る女は夫を妨ぐ。(少女)は少女の死を主る。

○(金匱)のほくろは金銀を妨ぐ常に盜難に遇ひ易し。(目の下)

○(禁房)のほくろは姿淫を主る、また盜難あり。(目尻の下)

○(盜賊)のほくろは兎角盜み心あり。(同)

○(遊軍)のほくろは旅行に宜しからざるものとする。(顴のうしろ)

○(書上)のほくろは學問無し(學校等に入るを得ず。)(同上)

- (玉堂)のほくろは總て位なし。(同上)
- (壽上)鼻の上の黒子は年上と同様なり(また老年時代を至ればその時代必ず持病がある。)
- (甲匱)のほくろは財産を妨ぐ。(法令の上)
- (歸來)のほくろは驅け落にて必ず途中悪し或は死す。(法令の中途)
- (堂上)(正面)のほくろは六親の位なれば一族に財力なし、しかも反對に自己の財力に頼らんとするもの多し。(顔の正面)
- (權勢)のほくろは兄弟役に立たず。また己れの權威なし(また劍難があるが、その時は必ず死する男は左女は右を観る。(同上))
- (兄弟)(外甥)のほくろは兄弟に力なし。(頬の下)
- (學堂)のほくろは學問なし。(耳の前)
- (命門)のほくろは火難を主る(また男は聰明なれども女は關係しない。)(同)
- (準頭)鼻の端の黒子は主に財なれど顔面の最も必要なる場所なれば諸事に妨げを起す。
鼻尖にあれば痔疾必ずあり一生除き得ず、またその部突然斑點を生ずるものは急に痔疾を起す小鼻の眞下にあれば大難に遇ふ鼻上に双痣を生ずれば私情起るなり。

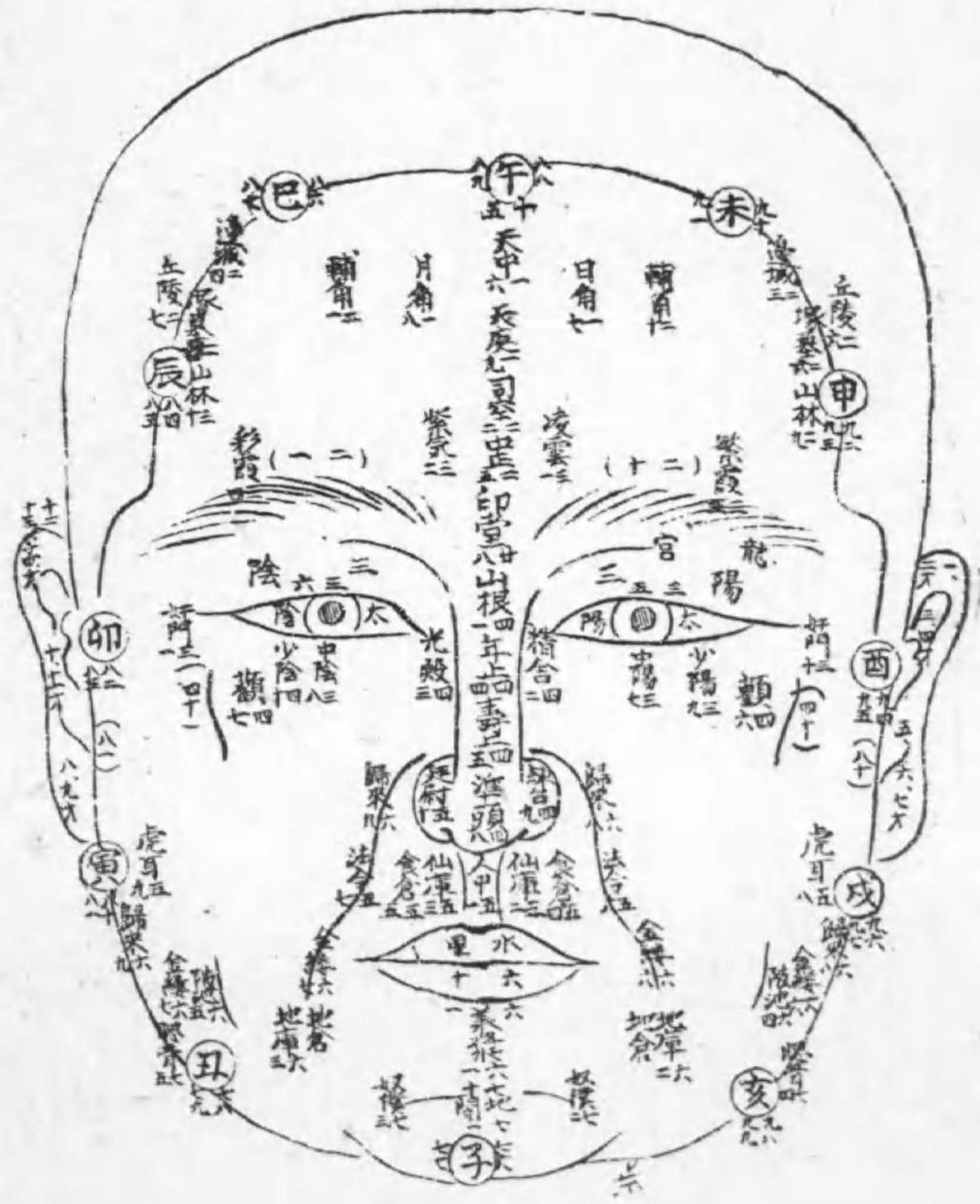
- (蘭臺)(廷尉)のほくろは散財を主る。(小鼻)
 - (法令)のほくろは親の死目に遇はず、また己れの權威に妨げあり。
 - (爐上)のほくろは所有の家屋なし。(法上の後)
 - (宮室)のほくろは妻の早死を主る。(法令の上節)
 - (園倉)のほくろは餓死を主る。(同上)
 - (后閣)のほくろは必ず他郷に走るものなり。(同上)
 - (守門)のほくろは貧を主る。(同上)
 - (兵卒)のほくろは餓死を主る。(同上)
 - (印綬)のほくろは雇人なし。(同上)
- 顔面以外のほくろは凡そ次の通り
- 手足の黒子——兩肘の上に近きにある者は死門と云つて病厄のある徴である、兩肘の内の下に近くあるのは壁壘へきりといつて富者の人となる兩肘の頭にあるのは災厄がある、兩肘の折目にあるのは技巧がある兩肘の外にあるのを城社と云ひて貴い徴である、兩腋の下にあるのを金匱といひて富をなす徴である、兩臂(臂は肘と手くびとの間)の外にあるを厄門と云ひ、劍難がある徴である、兩方の掌にあ

るのは富貴の人となる徴である、両手、臂にあるのは財を生し物事に巧みな人である、兩腿の上にあるを福府と云ひ、多くの部下を使ふ人である、兩腿の後にあるを徳徳底と云ひ、福德旺相するの形である兩の膝後にあるのを財苑といひ、牛馬六畜を飼つて繁昌する人である、兩膝の骨の上にあるを威揚といひ、名聲を發し威勢をあげる人である、兩の膝頭にあるのを五府といひ、財産を蓄積する人である、兩足の脛の骨の上にあるのを榮源と云ひ、一生奔走勞苦をする人である、足のうらにあるのは寶藏と云ひ、大臣臣將となる徴である、足の指の股にあるのを外庫といひ、多くの部下を従へる人である。

○體身の黒子——黒子が兩乳の上にあるのを男女宮と云ひ、男女の子供の多いのを表はしてゐる、兩乳の下にあるのを左庫右庫といひ、金錢の蓄積することを表はしてゐる、兩乳の間水おちにあるのを福苑といひ、福壽にして安樂なのを表はしてゐる、水おちの上にあるのを靈穴といつて智慧があり、兵權を執るのを表はしてゐる、臍の中にあるを龍關といひ、福貴にして智あり又貴い子を生むのを表はしてゐる、咽喉の上下に近きものを天柱といひ、人の引立があることを表はしてゐる、下に近きものは死傷の難があるのを表はしてゐる、頂上にあるを勢源といひ、權威があつて吉であることを表はし、腦後の骨の上にあるを壽堂と云ひて長命することを表はしてゐる、腰の中心に當るのを四大海と云ひ

海外に出て死することがあり、兩尻の上にあるを崇邱といひ、産業が多いことを表はしてゐる、兩肩の上にあるは貧苦であり、兩肩の前にあるのは淫慾が強く、兩肩の後にあるのは財産があることを表はしてゐる。

圖年流面顔



○各流年に出たて血の色を以てその變化を見ゆるし

七、流年變化法

一、五行と流年法

○人相の流年法はいろいろあるが、一番早くわかる法は身體の五行で押へることである、たとへば水ならば六年三年、木ならば八年、四年火ならば又六年三年、金ならば又四年八年、土ならば五年十年である、又その五行を押へる法は前項にも記したやうに木は肩腰なく火形は肩なくして腰あり、土形は方にして金形は肩張り、(これを員といふ員の字の如き形をする) 水は圓い、而して土と水とは共に肩腰があるのだから、人が自分の前に坐ればすぐわかることである。

従來の人相書を見ると、その流年法が顔面に現はされてかなり複雑してゐる、そのために書籍にて學ぶ流年法の如きは、殆ど人の頭腦に入らぬ名稱である、それについては正確なる流年秘傳を「高木相法秘傳書」中に詳説したが、秘傳の全部をこゝで公開するわけには行かぬ、尤も「人相の秘鍵」中にはその一部を公開したが、それは六壬法を知らぬために誰も應用しない、殆ど寶の持ちぐされとなつたやうだ、頭腦の働かぬ人相家が随分と世間には多いと思つた。

右の五行流年法はでたらめではない、今假に木形の人が昭和十四年六月に來たとしようか、その人は三十歳前後の年齢と見れば、まづあなたは二十四歳、二十八歳、三十二歳などに大變化があるといふ、その人の顔面は黒い、黒いとするは水である、夏六月（五月節ではあるが）になつては水体水が死んでゐる、易にすれば火水未濟であり、水火既濟である、病氣をしませんかと質問する、病氣をしてゐると答へる、病氣は胸部ですかと尋ねる、これは火が逆に水を越してゐるからである、又水が死せば木形の人には生氣がなくなる、事實胸部の病ひですと答へる、その時年はいくつですかと尋ねる二十八歳ですと答へる、昭和十四年二十八歳は壬子の生れである。木形であり、納音は桑柘の木である、年は卯年である、面相の部位は鬢のあたりである、即ち兩眉の端の骨の少しく凹んだ所である、その凹みが激しければ、そして色が悪ければ生命はない。

なぜなればその邊が「塚墓」である、年齢の二十六、七、九、三十歳はこの邊一體「郊外」「山林」「塚墓」「玄武」に該當してゐるのである、廿六歳が郊外に當り、廿七歳が塚墓に當ると一々正確に覺えないでもよい、法にも眼六年とあつて、二十五歳から三十歳までは中正から印堂にかけての部位であるから、この邊の形状でその吉凶を説けばよいのである、印堂が落ちて眉が交差してゐれば二十五歳は「中正」であり、二十六歳は「郊外」であるから二十六歳に命を終ることになり、二

十八歳は印堂であるが、この部が陥らず、玄武のあたりが高ければ命數はまだあつて病氣も一度は直ることになる。

そこで二十九歳は「山林」であるから、「山林」に入つた形でたとへこの部が豊肥してゐても、色が悪ければ發祥せず、三十歳も尙「山林」の中にあり、三十一歳は謂ゆる「額角」「輔骨」、眉にあつては「彩霞」に入るのであるから、まづ病氣もおこたり運もよくなるとして判断するのである。

人相はすべてこの流年と流年に當る部位の骨組みと、その部の氣色の吉凶とを觀、且年齢に引合せて判断しなければ、眞の吉凶は分るものではない、その最も正覺な法は「六壬式」であるが、この法は今こゝでは説かない、今相法上にある流年部位のつかみ方を大體下に示すこととする。

五管流年の法は耳八年といひ男子は左の耳を七年とし、右の耳を八年とする、併せて十五年である、それで歌にも

天輪一、二歳幼年の運、三四歳周滿して天城に至る、天廓垂珠五六七(歳)、八九歳天輪の上に停まる、天輪十歳十一歳、輪飛び廊の反るは必ず相刑す、十二(歳)、十三(歳)併せて十四(歳)、地輪、口に朝すれば壽き康し、十五歳は火星正額に居る。

とあつて、十四歳までが耳の形で見るのである、耳たぶが切れてゐるやうなれば八歳に變化があ

る、それが木形金形の人なれば百發百中である、その時父母をなくさないまでも父母と遠ざかることがあり、廓（内の輪）が反れば十一、十二歳の頃また同様のことがある、尙十四歳まで續く、女子の賤格はこの時分に異性を知るものもある、「地輪、口に朝すれば」といふのた耳たぶが、口の方に向いて段をなしてゐる形である、このやうなものは壽命が長いといふが、垂たれのないものはみな短命であるといふのではない、耳たぶがなくとも壽骨（耳の孔の前の骨）が高いものは壽命がある。

さて十五は火星正額、即ち額の上、鬢の生へ際に位する、それから、十六歳、十九歳、二十二歳、二十五歳と四年づつ飛んで、まん中の天中（十六）、天庭（十九）、司宮（廿二）、中正（廿五歳）と位する、つまり十一年間が顔の眞中の筋であるが、十七歳十八歳はその側面などになる。歌に

十六天中骨法成り、十七、十八日月角、運は十九に逢ふて天庭に應ず、輔角は二十、二十一、二十二歳司宮に至る、二十三四邊城の地、二十五歳中正に逢ふ。

とある、十七八歳は日月角に當るが、十七八歳頃の變化は骨法だけでは中々當らぬものである、日角月角にさう大した異状のあるものは少い、然し五行の法から押へてゆけば水火性ならば三年か六年であるから、三六十八歳で變化し、金木は二八十六歳で變化し、上形なれば十五歳二十歳で變

化するから、始めに押へた數によつて變化させてゆけば、十五歳で變つたか、十八歳で代つたか分るものである、然し運のよいものはこの邊ではあまり變りがない、悪いものは變り易い、但し十九歳天庭に應ずるところは男女何れも變り易いものである、十九歳を女の厄とするのはこのわけであつて、同時にこの前後戀愛をなし、又は結婚するものがある、二十歳の輔角といふ部分も顔面では少しわかり難い、然し火形のものなれば十八歳に變化があつて、二十歳に應ずるものであるから、五形で考へて行けば斷判することができる、土水のものも亦同じである。またこの時分よく父母何れかを失ふものであるが、父母の位は日月角にあつても、そこだけでは父母何れが先か後か分らぬことが多い、その時は齒と喉骨とを見るべきである。

齒を露はし、齒ぐきが出で、喉骨の高いものなどは先に父を損じ、陰氣の重いものは先に母を損ずるものである。

故に木形のものなどは先に父を損じ、土水形のものなどは先に母を損ずると云つてもよい、次に二十六歳から三十四歳まで九年間が眉の並びになる、即ち

二十六歳上つて丘陵を主る、二十七歳塚墓を看、二十八堂印堂に逢ふて平らかなり、二十九歳三十歳山林の部、三十一歳凌雲に上り、人命若し三十二に逢はば、顔の右に黄光紫氣を生じ、三十

三行いて繁霞はんかに上る、三十四、彩霞さいかにあつて明らかなり。

とある、二十六七歳は前に云ふやうに鬢の生へ際、山林塚墓の部である、丘陵は山林と同じである、この邊の骨が凹み、肉に力がなければ生活に苦勞することになり、眉もせまりその上病氣でもすれば生命もないことになる、よく青年が二十四五歳から、二十六七歳にして病氣をなし、重きは命を失ふのはこのわけである、「二十四歳邊城の地」とあるのが抑もよくない、邊城と塚墓とは壁一重である、故に邊城で命を失ふこともあるのである。

二十八歳は印堂に逢ふから、この時は大抵吉祥をなすのである、次は三十一歳である、三十一歳はいはゆる「凌雲に上る」で、次の三十二歳の「紫氣」とも同じである、額ぬかの骨に缺陷がなくば、誰しもこの時は凌雲、紫氣にのぼるのである、だから誰でも、三十一、二歳は吉であるといつてよい、従つて額ぬかに三十一、二歳に當る凌雲や紫氣といふ部位があるわけではない、今假にありとしてゐるのである、その部は實は兩眉頭の上である、然しこの場所に皺や黒子や缺陷などがあり、骨が陥つてゐれば凌雲に上つただけで再び天井から墜落することがある、木形金形三十二歳は變化の時である。

次の三十四、三十五歳の繁霞、彩霞といふのは眉毛のことであつて、眉の濃いのは繁霞であり、

美しいのは彩霞である、従つて禿げたやうなのは朝霞であり、亂れたのは亂霞といつてもよい、毛のバサバサしたのはこの時代に苦勞があり、密なのは安寧である、これから又六年間が眼及び眼の上下に位する。

三十五歳太陽の位、三十六上つて太陰に會ふ、中陽正に居る三十七(厄)、中陰三十八少しく亨たまる少陽年正に三十九、少陰四十兄弟少し。

とある、太陽といひ太陰といふも何れも目の周圍と見ればよい、三十八歳になれば何處にあらうとも少しく運がとほるといふのである、少陰は右の目尻、この部が缺けてゐれば兄弟が少いとす張りすぎて居るものも兄弟が少い。

眼は六年の運とすること下に説くが如くである、これは左右合せて六年で片々三年である。次で山根路遠し四十一。

となる、山根といふのは鼻の附根である、左右に分れた流年が又面の中央に戻るのである、次で鼻は十年の運を管する、そこで歌に、

四十二精舍を作り、四十三光殿に上る、四十四年上かみじやうにくわはり、壽上又逢ふ四十五、四十六七兩觀宮、準頭喜せうとうびて居る四十八、四十九歲蘭臺に入り、延尉相逢ふ正に五十。

となる、四十二、三歳は精舎か光殿かである、何れも目頭の上である、この部が缺没してゐれば精舎即ち寺をなすから、人に悲しみ事がある、缺没しなければ光殿即ち御殿をなすから人に喜びがあるといふのである、四十二歳を厄とするのは即ち、この精舎に於て妻を損し子を喪ひ、或は自身命を失ふことがあるからである、こゝでこの種の悲しみを通りすぎると四十三歳からは又運が向上してくる、さういふ意味もこゝには存在する、五八〇四十、五六〇三十、二五〇十、一四が四十、六七〇四十二、いろいろな数の出し方で、四十歳から四十二歳までの變化を知ることができる、今人が三十二歳で事業を始めたとする、三十三歳からあとは何れも苦勞で、三十九歳まで悲しみ、四十一二歳或はダーク・チエンヂとなり、四十三歳から又新規禱直しとなるのである、これから四五歳は鼻の上であるが、四十六七歳は兩方の額骨になる、この邊に力がなければ苦しみが多く、力があれば幸福となる、四十九歳蘭臺に入るといふのは鼻の先端小鼻に接するので、蘭臺か廷尉かは鼻の形状如何にあるのであつて、必ずしもこの名稱があるのではない。

こゝまでが凡そ人生の三分の二の努力期間で、これから安寧の期に入るのである、今までの説明はみな人間の一生の生活をたへて説明したものである。

五十一歳からは鼻の下の「人中」になり、横に開いて五十五歳までの五年間になるが、重に兩方

の法令（皺）の中間に位する、歌に

人中五十一人驚く、五十二、三仙庫に居る、五十右四合に食倉盈ち、五十五歳祿倉の米を請ひ得ん。とある、仙庫とか食倉とか祿倉とかいふ部分は皆人中の左右である、こゝが張つて力があり血色がよければ衣食に不自由することはないのである。次が法令になる。

五十六七法令に明らかに、五十八九虎耳に逢ひ、耳順の年（六十）水星に逢ふ。

次の五年が横に飛んで耳の前までに至る、齒をかみ合せれば動く骨が虎耳である、そこで耳順の年即ち口に至るのである、口は耳に従つてゐるからこの稱があるのである。次は

承漿（唇の下）正に居る六十一（厄）、地庫六十二三に逢ふ、六十四陂地の内に居る、六十五鵝鴨の鳴く處、六十六七金縷をうがち、歸來六十八九にのぼる、矩の年（七十）を頌堂に逢ふて隴え、地閣しきりに添ふ七十一。

となる、陂地、鵝鴨は額の下の少し凹んだ所で、これを池などにたとへたのである、陂地は前にもいふやうに破れた堤である、鵝鴨の鳴く所は勿論池などであり、こゝが六十七八歳の位に當り、六十八、九歳は歸來で前の虎耳の下の邊になる、それから七十一は又唇の下顎のくゞりの出來た所、それから又左右に

七十二三奴僕多し、七十六七子の位をたづね、

となつて顎の先端になる、子の位は十二支の子の位である、これからは顔の外まわりを廻つて

七十八九丑牛耕す(丑の位)

太公の年一歳を添へ(寅の位)

さらに寅虎にのぞんで鬘を偏かたむけん。

八十二三、卯兔の宮(卯の位)

八十四五、辰龍に行く(辰の位)

八十六七巳蛇にあたる(巳の位)

八十八九午馬輕し(午の位)

九十九十未羊明らかなり(未の位)

九十二三猴(猿)に結果す(申の位)

九十四五鶏聲を聽く(酉の位)

九十六七犬月に吠え(戌の位)

九十八九猪に負ふて呑まん(亥の位)

若し人生の百歳をすぐるを問はば、
顔を重ねて朝上すれば長生を保つ。

となる、尙この流年法に六壬流年法を以てすれば吉凶禍福掌中のものを指すが如くなる。

二、五官で観る運限法

此の法は眉、目、鼻、口、耳などでその人の運氣のよしあしを観る法である、たとへばその人の
顔中で耳だけよければ、耳に當る十年がよい、眉だけよければ、眉に當る十年間運がよく、眼だけ
秀でゝゐれば眼に當る十年間がよい、鼻だけ豊満なれば、鼻に當る十五年間運がよい、口だけ完全
なれば、口に當る十年がよい。まづ耳を十才までの運とすれば、耳のみよいものは十才までは幸福
であるが後がわるい、眉を三十才までの運とすれば、眉のよいものは、三十才まで運がよい、鼻を
五十才までの運とすれば、鼻だけよいものは五十才までの運がよく、後はわるいといふ風になるの
であるから、さう観ても仔細はない、だから五官が揃つて形の完全してゐるものは、中途に苦勞す
ることなく、又晩年も幸福なのである、支那では上古人の壽命を百二十才としたが、後には段々
約めていつて遂に七十五才とした、それによつて説く所の法は次の如きものである。

【1】耳八年——まづ男子は左の耳を七年とし、右の耳を八年とする、女は此の反対である、又額を十年とする、併せて二十五年を人生の謂ゆる初年運とする、然しその間の吉凶を云へば、耳の輪の上に黒子の生ずるものは聰明な人で幸福である、耳の内に大痣などのあるものはわけて壽命の長いものである、垂珠の上にあるものは財産ができる、耳の門の前にあるものは幾度も火災に逢ふ人である。性質は飽き易い人で、爲す事も始めがあつて終りが無いやうである。結末のつかぬ人である、白い珠のやうな米粒ほどの色が出るは、貴い、紅いのも吉である、黄いろなのは病氣である、黒いのは五體衰弱である、腎臓の病氣である。輪の上に火のやうな色のもが出るると七日の中に争ひがあり財を破ることがある、或は色の焦げたやうなもの、青いものが出ると壽命が長くない、これは十才までの運氣を云ふのではなく、二十五才までの事を云ふのである、又耳や額に傷があるとその時期に運勢上に變化がある。

【2】眉四年——眉は四年間人の運氣を管理する、左が二年二十六七、右が二年二十八九才である、眉の形が悪ければこの時期に運勢上の變化がある、黒子が眉の中に生ずるものは此の年頃までに水難がある、眉の頭に生ずるものは剛情な人である、眉の上に生ずるものは貴い人である、眉の中部を豎に貫く紋があれば從四位に至る人である、眉に土の字や鳥の形の紋があると大臣大將になる人

である、眉の上に白い氣色が忽然現はれると悲み事があり不幸がある、紅色の紋が現れると七日の中に争ひ事や官訟事などが超る、黄いろが眉に入ると喜び事がある、眉の中から忽然長い毛が生ずると運氣が變り又長命する、然し壯年の中に生ずるのはよくない、四十代五十代に生じた方がよい、二十才の中に此の長い毛が生じたならば三十才で死ぬる、四十才で生じたならば長命であり且三年の内に立身出世をするものである。

【3】眼六年——眼は人の運氣を六年間管理する、左の目は三十一、三十二才、三十三才の間、右の目は三十四、三十五、三十六才に當るのである、黒子が目ふちの眼れた所に生ずるものは盗みをする眼の下にあるものは妻の縁が遠い、早婚すれば破縁をする、女子も亦同じである。又左右の目下何れかに忽然黒い氣色が生ずれば半月の中に家内に驚き事悲み事が起る、紅色が起れば火難に逢ふことがある、目の下の青いのは争ひ事訟事起る、赤い火のやうな色がさせば警察に引かれるやうなことが起る、黒い色は損害失財である、黄にして明らかなのは最もよい、之は大吉である、女の目の下青きは夫を失ふ（既婚者）赤い色は産厄である、眼尻に黄色現はれ、その色が光つて潤ひのあるは、夫が位を増し身分を高める、又財祿を増進するの喜びがある。

【5】鼻十年——鼻は十年の運氣を管理する、眉の間が三十六才で、左の小鼻まで四十五才であ

る。黒子が山根にあるものは中々結婚が出来ない、之は男女とも同じである。鼻の側にあるのは大凶である、鼻筋の上にあるものは、兄弟があつても力とならず、又離れくゝになる、眉と眉との間にある圓いホクロの黒いものは大吉である。次に氣色をいへば、まづ、印堂、山根（鼻のつけ根）の部が明るく黄色であるものは吉で何事も心に叶ふものである、黒くして暗惨なのは運氣の滯るしるしである。年壽の黄明なのは吉である、黒いのは病がある、赤いのは官災がある、裁判に出されることがある、青いのは損害失財がある、白いのは悲み事不幸などがある、鼻頭の黄明なのは喜び事が重なる、黒いのは大病にかゝるしるしである、赤いのは破産がある、白いのは凶事が起る。

【5】 口十年——口は又人の運氣を十年間だけ管理する、五十六才より六十四歳までの十年間である、黒子が唇の上にあるものは一生酒身に苦しむ人である、唇の内にあるのも同様である、口の角にあるものは水難がある、紋理があつて法令と共に口に入るものは食物の乏しい人である。次に氣色は紅色にして潤ひのあるのは貴くして福がある、黒いのは賤しい、青いのは心に毒がある、白いもの同じ、黄いろいのは病がある。只口に遠ざかつて黄色の明るいのは最も吉である。

三、變化期の秘法

然して流年を秘法とする人相家のあるのは前に説いた通りであるが、之は眞の秘法ではない、眞の秘法は六壬法を學ばねばならぬ。然し六壬法は又別に一課をなす故にこゝに之を説明する事はできない。人相には又化氣五行の法もあるがこれは素人に通説し難い、故に茲にては改めて六壬法に依る簡易な變化法のみを記すこととする。

その法はまづ十二支を以て算する。即ち

- 子は天一の數……毎年十年に變化する。
- 丑は地六の數……六年目毎に變化する。
- 寅は地三の數……三年目毎に變化する。
- 卯は地八の數……八年目毎に變化する。
- 辰は天三の數……三年目毎に變化する。
- 巳は天七の數……七年目毎に變化する。
- 午は地二の數……二年目毎に變化する。
- 未は天七の數……七年目毎に變化する。
- 申は地四の數……四年目毎に變化する。

酉は天九の數……九年目毎に變化する。

戌は地四の數……四年目毎に變化する。

亥は地六の數……六年目毎に變化する。

以上の變化は吉凶何れかであつて、吉もあれば凶もある、また十年目毎に變化するものは、十歳、十一歳は變化の跨りであり、六年目毎に變化するものは、六歳、七歳は變化の跨りである。その又跨りは吉であるか凶であるかは、別は大運行法、三限法などがあつて、何歳から何の運が始まるかといふことも分つてゐるのである。その法たとへば寅年生れの人は逆行して丑に至り、丑の六と寅の三と合せて九歳に財帛宮に至る故、この時親に離れるか親を失ふかに至るものである。また三限法は寅と亥と合するから、寅の三と亥の六とを掛けて三六、十八歳之を半減して九歳、それに亥の六を又加へて十五歳に身を立てる一限となる故に、十五歳の時からその人の生活又は苦勞は始まるのである。その例で今度は卯年の人を見ると、卯は八の數であるから、八歳、十六歳二十四歳などに變るものであるが、逆行して寅の三と合すれば十一歳であるから、此の時財帛宮に至り、又三限法は戌の四と掛け合せて四八、三十二歳、半折すれば十二、それに戌の四を加へて十六歳に一限となるのである。

十二支何れの生れも皆このやうにして見る。

○朱雀、天后、青龍(午、子寅)の時は大吉、何事でも通ずる。

○貴人、太常(丑、未)の時は中吉、十分の五は通ずる。

○太陰、騰蛇、六合(酉、巳、卯)の時は少しく凶である。

○勾陳、天空(辰、戌)の時は大凶である。

又この年々の吉凶を見るのは、午年生れならば一つ飛して申を十一歳に算へ、又一つ飛して戌を二十一歳に數へ、又一つ飛して子を三十一歳に數へる。その時吉凶を見る人が三十七歳であつたらば、後の三十一歳子より、三十七歳午の朱雀に當り、人相上は左の眼珠となる。眼珠清明にして赤脈などの走ることなければ朱雀の吉慶を得て運氣隆盛の時にあるのであるが、赤脈眼中に走り居れば、吉中に凶を見ることがあるのである。

勿論、この流年は六壬法に依つたのであるから、この法に拘泥せず、人相學上の變化期を基として吉凶を見るべきである。前に述べたやうに八年づゝに變化するものは、この時輔角に入るのであるから、この部に痣、傷がなければ或は身が定まり、官職を得、或は出世の端緒となるのである。痣、傷などあれば、二十四歳に凶運に出遭ふのである。寅年三年毎に變化するもの、三九、二十七

歳は塚墓となる故、この邊に缺陷があれば大病にかゝり、墳墓に入ることになる、巳年七年運のもの、三七、二十一歳は輔角となるから、この部に缺陷がある時は、遂にその病が原因となつて病死することに至るものである。以上の如く、顔面に於けるその部の缺陷の有無を考へ、右の流年法を用ゆれば、人の吉凶は掌中のものを見るが如くに明らかなるに至るものである。

(をばり)

みどか手相人

昭和十五年一月十五日印刷
昭和十五年一月二十日發行

定價一圓六十錢

著者 高木 乘
東京市世田谷區代田二ノ七三三

發行者 赤塚 三郎
東京市小石川區鷺籠町五番地

發行所 赤塚書房
東京市小石川區鷺籠町五番地
電話大塚五四二番

印刷者 宮島富治
東京市小石川區鷺籠町五番地

高木 乘著

人生運命讀本

全一冊 定價 金一圓四十錢 送料 十錢

運命觀的のエッセー、かくの如く徹底せる議論はない、著者は實は隠れたる一知識人である文を能くし、畫を能くし、書を能くし、刀劍、書畫の鑑定を能くし、一方には易學に通じ禪學に通じ、社會に通じ、篇中説く所のもの青年論あり、孝道論あり、親子論あり、結婚論あり、夫婦論あり、處世訓あり、人間訓あり、運命を知るもの、金と徳、希望、工夫の生活などすべて三十篇のエッセー、一として金玉の文字ならざるはない。

高木 乘著

運と心と行

全一冊 定價 金一圓二十錢 送料 金六錢

『人生運命讀本』の姉妹篇である。項目數十、運命觀と、處世訓と隨筆とを兼ね、その中一つ手の運命占法を載せてある。記述平坦にしてよくその要旨を傳ふ趣味の書としても價値少なからず。

發行所

赤塚書房

電話 大塚(86)五四二番

東京市小石川區駕籠町五番地

命理會學長 高木 乘先生述

高木相法秘傳書

全五冊

世にありふれたる相法の書とこと變り、相法の内容を公開せるものにして、常に相法家は秘傳として教へざるものをも委く公開せるものであつて、抑も始めは遺傳學說的觀法より起り、遂に流年秘訣の公開に及ぶ、わけて各部門に於ける吉凶の見所は、「人相手鑑」の中にもこれを公開したが、本書に於ては更により多く詳細にその秘法を示してゐる、實に最近相法學界に於ける革新と將ての最高峯を示せるものであつて、凡百の相法家、わが六壬流年の秘法を用ゐざるはない、運命學者として眞に學者らしき態度を有し、その良心を堅持して孜孜倦まず、斯道にあるものを教へ、大衆を導きつつある、先生の文筆、いかに親切にして丁寧なるかは、さきに「人相の秘鑑」を読み又、ここに「人相手ががみ」を読みたるもの、夙に知る處であらう、深く觀相の秘奥を窮めて修身齊家の徳とせんとするもの、更にこの秘傳書に依つて研究すべし。

日本紙版、優良日本紙綴和裝、特上製本、全五卷、高木乘題箋附純布製帙入、挿畫百數十個、一冊三圓帙、金一圓一時拂金十六圓、時局中一時拂二割引金十二圓八十錢、送料金三十三錢(外地送料共十三圓八十六錢)

發賣所

東京市世田ヶ谷區
代田二丁目七三三

高木 詞館

電話松澤二二九八番

振替東京五六一一九番

昭和四十年新刊總目錄

古谷 綱武	山室 靜	田邊 茂一	青柳 優	淺見 淵	淺野 晃	鹽月 赴	上林 曉
作家の 世界	現在の 文學の 立場	作品の 印象	現實批 評論	現代作 家論	讀書と 回想	薔薇の 世紀	文學開 眼
價・八〇	價一・四〇	價・八〇	價・八〇	價・八〇	價・八〇	價・八〇	價・八〇

評論

赤塚書房版

終

